

バレー部の記録Ⅴ
思い出など投稿と各種資料



2009年紫友同窓会への寄稿

五中クラブ(バレー部OB・OG会)

報告

1. バレー部の歴史

バレー部は、戦後間もない昭和21年、前年より竹内先生を中心に同好会的活動として発足した後、飯塚(めしづか)先生の赴任により正式に発足しました。戦争で駕籠町校舎が消失し、11月同心町に移転し、本格的な活動が開始されました。

昭和25年には、男女共学により女子バレー部にも多数の入部があり、女子の活動も本格化しました。

昭和27年、駕籠町校舎のグラウンドの隅を整備し手作りコートを作りました。翌年OBチーム「五中クラブ」を作り、企業チームとの交流を行いました。これがOB・OG会の名前となっています。

○昭和30年6月5日 「五中クラブ」 駕籠町コート



昭和39年、東京オリンピック開催を期に、高校のバレーも9人制から6人制に変わり今日に至っています。

2. 60周年記念イベント

平成18年、昭和21年から数えて60年(還暦)になることから、記念のイベントを行うことになりました。

6月に、現役・OB・OGが体育館で午前中試合を行い、午後場所をグリーンコートカフェテリアに移し、五中クラブ総会と60周年記念イベントを実施しました。会場には昭和9人制時代の写真・ユニフォーム・歴代顧問コーチの一覧等の展示を行いました。参加者は、昭和21年卒の香田大先輩から、この年発足した「小石川中等教育学校」1年生(中学生)まで幅広い世代が集合し、9人制時代・6人制の創成期・女子チームの思い出などを会食しながらすごし、最後に校歌を斉唱し終了しました。



3. 現役支援

60年の節目のイベントが終了し、新たな1歩を踏み出すに当たり、会として現役に対する支援を強化することといたしました。

平成19年には、中等女子が、体育授業で使用するボール(4号球)を借りて練習していたことから、ボールとボール入れを購入しました。

平成20年には、応援旗を作成しました。従来「小石川高校」の名前が入った応援旗があり、おもに男子を中心に試合会場に掲げていました。そのころ「中等教育学校」の女子チーム父母より応援旗があればとの話があり、会として作成することになりました。

旗の作成には、まず言葉です。一般的には四字熟語が多く使われています。言葉の決定に当たり、昭和45年卒渡邊さん（現筑波大付属高校教諭）に10の言葉をリストアップしていただきました。6月の総会で検討した結果、次の言葉に決定しました。

「戮力同心」（りくりょくどうしん）

これは、「春秋左氏伝」に出てくる言葉で、「力を戮（あ）わせ心を同じうす」意味は、一致団結・協力して事に当たる。チームワークの重要性を説いた言葉です。団体スポーツにぴったりの言葉です。

また、クラブの歴史のところにあるように同心町で産声を上げたバレー部であることから、クラブの応援旗の言葉として最もふさわしいとの結論になりました。

完成後、栗原校長先生に校長室で披露し、紫友同窓会90周年の記念祝賀会会場にも持参し祝賀会参加OB・OGと記念撮影を行いました。



4. 更なる発展を目指して

生徒数が半減したことから、クラブ運営が厳しくなっています。OB・OG会も更に現役の活動を支援し、卒業後も永く交流が続くよう運営を行ってゆく予定です。

2012年紫友同窓会への寄稿

バレー部OB・OGの活動状況 と仲間たち

～五中クラブとフォーティーズ～

バレー部五中クラブ会長 小林偉昭

017Dの小林偉昭です。高校2年の時に6人制に切り替わり、ポジションは少し背が足りずアタッカーにはなれず、セッターになりました。当時は今と違ってバレーは屋外スポーツでした。風の読み方、太陽のまぶしさの避け方、こじやりの地面での回転レシーブ等を思い出します。

現在、バレー部五中クラブの会長を、さらに、昭和40年代中心のバレー部OB・OGの懇親目的の会、フォーティーズの会長も務めています。それぞれ最近の活動状況と仲間たちについて報告します。

1. 五中クラブ

創立66年のバレー部OB・OGの組織です。6年前に府立五中時のクラブ発足から還暦60年の節目を迎え、後援会として組織化し、次のような取り組みを行っています。

(1) 現役に対する支援としては、

高等学校時代の応援旗「虚心坦懐」に加え、6年前、中等教育学校の名前の入った応援旗「戮力同心」（力をあわせて心を同じく戦う）作成を皮切り

に支援活動を始めました。その後、中学生用ボールとボール入れの購入、女子のユニフォーム作成を、昨年は、3年ぶりに連盟登録復活した男子バレー部の定着（チームが組める人数維持）を期待し、男子のユニフォームを作成しました（写真参照：左女子、右男子）。顧問の先生の指導の下、男子女子ともに、今後の活躍を期待しているところです。



(2) 現役とOB・OGの親睦としては、

毎年、総会を開催しています。午前中、アリーナ（体育館）で中1から高3（中6?）の現役とバレーの試合を楽しみます。熟年OB/OGは、女子現役と試合をします。昔と同じようにジャンプしたつもりでも、コートから10cm位しか離れていません。その後、会議室で総会を開催し、さらに現役、OB・OG、顧問の先生も一緒になって昼食を楽しみながら懇親会を実施します。昨年は前ニュージーランド大使016高橋利弘さんの講演もありました。また毎年現役との集合写真を撮り（写真参照）、五中クラブ会報にまとめてOB・OGへ近況報告をしています。



(3) 今後の取り組み

70周年に向け、五中クラブの歴史を1冊の本に集大成すべく、資料の収集と各年代の思い出など、蓄積する予定です。ご協力をお願いします。

2. フォーティーズ

昭和40年代のOB・OGが、集まり楽しんでいます。いくつか紹介します。

(1) 懇親会：忘年会・新年会・暑気払いその他適宜理由を付けて集合し、飲み会を楽しんでいます。1年前からは毎月有志による指先健康維持・ボケ防止のために麻雀懇親会も実施しています。018梅島雅夫さんが「ちゅんちゅん亭」を運営しています。昨年の総計では、017某氏が断然トップでした。

(2) ゴルフ：企画者に賛同した人が参加するという、やりたい人、参加できる人ベースで無理をしないやり方をしています。すでに1月、3月に開催し、今年も年3～4回を予定しています。

(3) 社会見学：019渋谷一行さんの手配により貴賓室にて観戦、エリザベス女王の気分。今年は、ニュージー

ランドトロフィーGⅡを4月に中山競馬場の貴賓室で観戦。さらに、5月に東京競馬場でのビクトリアマイルGⅠを観戦し、3連複での万馬券を何人かが勝ち取りました。おめでとう。

(4) 海外旅行：昨年3月退職された菊池先生・022渡邊雅之さんの企画による「全国漢文教育学会」主催の「成都・漢中の旅」に参加しました（昨年8月）。蜀の都・諸葛孔明ゆかりの地・「国士無双」韓信を祭る漢中・李白杜甫ゆかりの地などハードスケジュールでの訪問でしたが、思い出が残りました（写真参照）。今年3月の「桂林・広州の旅」では、漓江川下りを楽しみ、広州で働く後輩慰問と称して広州料理をご馳走になったり、海鮮料理に舌鼓を打つなど「自然と食」に感激しました。



(5) 芸術鑑賞：今までに025大関真佐子さんの招待で、熊川哲也の飛翔の美しいバレエ（ボールではありません）や仲間由紀恵主演の琉球ロマンス『テンペスト』の観劇なども楽しみました。

これからも世代の幅を広げて、各種の懇親行事を企画していきます。以上

2015年紫友同窓会への寄稿

五中クラブ（バレー部OB・OG会）にとって、昨年はいよいようれしいニュースがありました。NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」に、059卒の中島歩君が、仲間由紀恵さんが演じる「蓮子さん」の夫役で出演しました。この番組は、蓮子さんのモデルとなった白蓮のお孫さんが017卒であったり、鳩山邸がロケ地に利用されたり、小石川と縁がありました。中島君が今後、役者として飛躍することを期待しています。11月に開催した総会には、中島君は来られませんでした。同期の仲間が来て、アリーナで往時を思わせるプレーを行い、試合で男子現役を大いに鍛えました。

その現役ですが、昨年4月に男子7名・女子5名の入部があり、総会当日盛り上がりました。特に男子については、3年前まで部員が6名そろわず、休部状態にあったものが、高学年（高校生）低学年（中学生）の2チームが編成できるようになり、隔世の感があります。OBの梶田先生の熱心な勧誘・指導のたまものです。2チームができたため、五中クラブとして、ユニフォームを1式購入贈呈しました。



OB・OGの親睦については、昭和40年代卒業の有志グループ（フォーティズ）の活動について紹介します。

○旅行：3月、孔子廟・関帝廟を訪ね新幹線で巡る台湾旅行 9月、音楽家の足跡を訪ねるウイーン・ザルツブルグの旅 11月、85周年会の14名による奈良旅行(第2回目)に3名参加

○競馬：4月、ニュージーランドトロフィー（GⅡ）中山競馬場 5月、ビクトリアマイル（GⅠ）東京競馬場府中では、初めて天皇陛下が観戦された部屋で1日楽しむ。また、女子顧問の中野先生も参加。

○ゴルフ：主に、静岡・神奈川を中心に開催。

○麻雀：025卒OBの自宅を「ちゅんちゅん亭」として、毎月土曜日か日曜日に1回開催。その後懇親会。

○芸術鑑賞：025卒OGの案内で、Kバレエ・その他舞台鑑賞。

○五中クラブ 現役との試合や昼食兼懇親会に参加。

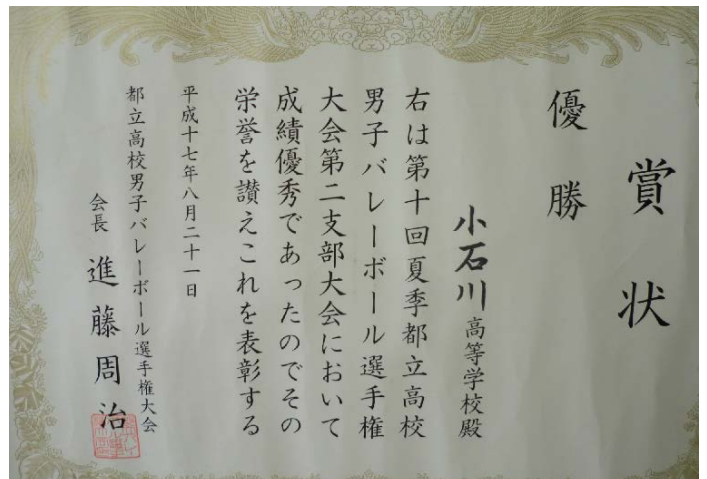


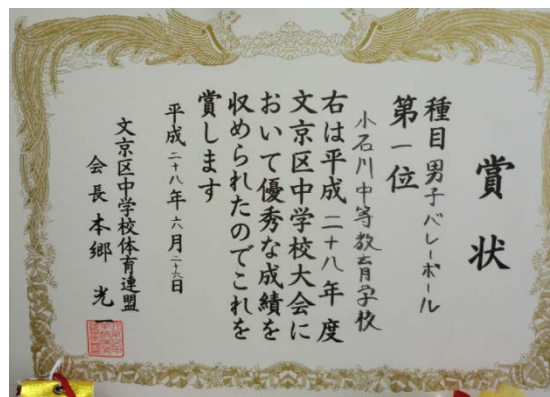
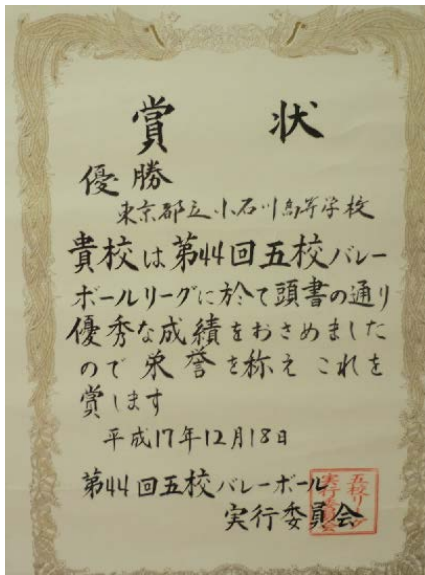
今後も、現役に対する支援、親睦を深めるとともに、2年後のバレー部70年を振り返るイベント・記念誌の発行の準備を進める予定です。思い出や写真などの情報提供をよろしくお願ひします。 018B 梅島雅夫

| 年度 | 男子 | | | | 女子(旧姓) | | | | | |
|-----------|-----------|------------|---------------|------------|----------------|----------|-------------|------------------|---------|--------|
| | 顧問の先生 | コーチ | サブコーチ | キャプテン | 顧問の先生 | コーチ | サブコーチ | キャプテン | | |
| 1946(昭21) | 竹内利貞 | | - | 城崎照彦 | | | | | | |
| 1947(昭22) | 飯塚 鉄雄 | | - | 不明 | | | | | | |
| 1948(昭23) | 飯塚 鉄雄 | | - | 福田光治/波多野収通 | | | | | | |
| 1949(昭24) | 土橋 荘司 | | - | 小原 誠/石井定雄 | 土橋先生 | | | | | |
| 1950(昭25) | 土橋 荘司 | 福田光治 | - | 波多野義治 | 土橋先生 | | | | | |
| 1951(昭26) | 土橋 荘司 | 福田光治 | - | 阿部元一/成見和男 | 土橋先生 | | | 清田(旧本)部/倉光(旧村)選手 | | |
| 1952(昭27) | 土橋 荘司 | 波多野収通/近藤誠男 | - | 水野 基 | 土橋先生 | 櫻島久光 | - | 水野(須永)悦子 | | |
| 1953(昭28) | 土橋 荘司 | 近藤誠男 | - | 東山(陳)光夫 | 土橋先生 | 櫻島久光 | - | 尾崎(赤野)澄子 | | |
| 1954(昭29) | 土橋 荘司 | 波多野義治 | - | 傅 隆康 | 土橋先生 | 阿部元一 | - | 渋谷(田中) 梢 | | |
| 1955(昭30) | 土橋 荘司 | 高橋一郎 | - | 平川揚二 | 土橋先生 | 水野(須永)悦子 | - | 野々村(福業)カヨ子 | | |
| 1956(昭31) | | 高橋 一郎 | - | | | | - | | | |
| 1957(昭32) | | | - | | | | - | | | |
| 1958(昭33) | | | - | | | | - | | | |
| 1959(昭34) | | | - | | | | - | | | |
| 1960(昭35) | | | - | | | | - | | | |
| 1961(昭36) | 本多哲郎 | | - | | 大谷 喜明 | | - | | | |
| 1962(昭37) | 本多哲郎 | 茂木 正寿 | - | 高橋 利弘 | 大谷 喜明 | 石塚 浩司 | - | 木原洵子 | | |
| 1963(昭38) | 本多哲郎 | 前島 浩一 | 小野 親宏 | 里吉 忠昭 | | 氏家 祥夫 | - | 林順子 | | |
| 1964(昭39) | 本多哲郎、竹野 博 | 小泉 芳久 | 奈良 日出男 | 根岸 勳次 | | - | - | 小島(小谷) 雅子 | | |
| 1965(昭40) | 竹野 博 | 長野 俊治 | 高橋 利弘 | 森田 力夫 | 飯田 満寿夫 | 白坂 武男 | - | 四戸(青木) 直子 | | |
| 1966(昭41) | 竹野 博 | 里吉 忠昭 | 岩間守正 | 松下 久雄 | 飯田 満寿夫 | 鈴木 和嘉 | 小林偉昭 | 漆田(神山) 礼子 | | |
| 1967(昭42) | 竹野 博 | 梅島 雅夫 | 根岸 勳次 | 加納 博義 | 飯田 満寿夫 | 小林 偉昭 | - | 朝倉美登理 | | |
| 1968(昭43) | 竹野博、市毛 勝雄 | 森田 力夫 | - | 酒井 文彦 | 西川 朝彦 | 美浦 隆 | - | 緒方(宮原) 真里 | | |
| 1969(昭44) | 市毛 勝雄 | 松下 久雄 | 岸田 隆夫 | 水口 志津男 | 西川 朝彦 | 渡辺 栄三 | 福島 一郎 | 三浦(土屋) 南海子 | | |
| 1970(昭45) | 市毛 勝雄 | 鈴木 喜治郎 | - | 竹山 年郎 | 西川 朝彦 | 福島 一郎 | 村上順二 | 坂内由美 | | |
| 1971(昭46) | 市毛 勝雄 | 渡辺 雅之 | 佐伯 英一郎 | 武馬 友義 | 西川 朝彦 | 村上 順二 | 浅子広 | 下川(大関) 真佐子 | | |
| 1972(昭47) | 市毛 勝雄 | 境 大学 | (松下 久雄) | 鈴木 康嗣 | 西川 朝彦 | 大野 清志 | 中村裕志 | 渋谷知英子 | | |
| 1973(昭48) | 市毛 勝雄 | 佐々木 邦彦 | 折田 俊平 | 古閑 雅章 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 佐竹 宏 | 橋本 泰 | 浅子(鈴木) 敬子 | | |
| 1974(昭49) | 安藤 唯夫 | 武馬 友義 | 綱河 仁志 | 阿部 光夫 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 橋本 泰 | 赤塚孝寿 | 森田裕子 | | |
| 1975(昭50) | | 市田 耕資 | - | 宮本 卓治 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 橋本 泰 | - | 松保(植村) 美雪 | | |
| 1976(昭51) | | 鈴木 康嗣 | 福家 忠弘 | 藤生 栄一郎 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 武馬 友義 | 溝口俊郎 | 山浦 典子 | | |
| 1977(昭52) | 寺井 泰明 | 福家 忠弘 | 若菜 勉 | 滝口 隆司 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 溝口 俊郎 | 住原真一 | 近藤(小西) 雅子 | | |
| 1978(昭53) | | 宮本 卓治 | 松保 雄士 | 星野 直史 | 西川朝彦、牛尾博孝 | 溝口 俊郎 | 住原真一 | 岩瀬まなみ | | |
| 1979(昭54) | | 宮崎 洋 | 林 英輝 | 清水 調 | | 阿部 光夫 | 森田徹 | 山田まさみ | | |
| 1980(昭55) | | 曾我 広太 | 上田 仁 | 菅野 晃靖 | 瀬谷 三郎 | 緒方 昌美 | 小西雅子 | 森川(伊藤) 昌子 | | |
| 1981(昭56) | 中山 清 | 上田 仁 | 内田 明秀 | 早川 勝己 | 瀬谷 三郎 | 星野 直史 | 岩瀬まなみ | 山岸(杉山) 葉子 | | |
| 1982(昭57) | 中山 清 | 内田 明秀 | 谷口 耕一 | 菅野 靖雄 | 瀬谷 三郎 | 星野 直史 | 篠原利明 | 森林(白石) 智佐子 | | |
| 1983(昭58) | 古山 光久 | 谷口 耕一 | 菅野 晃靖 | 村田 弘信 | 瀬谷 三郎 | 篠原 利明 | 国分勇二 | 矢野(川瀬) 史乃 | | |
| 1984(昭59) | 古山 光久 | 菅野 晃靖 | 木元哲也、竹岡高文 | 寺林(高橋) 明宏 | 妻木 貴雄 | 国分 勇二 | 原田、早川勝己 | 橋立(南波) 純子 | | |
| 1985(昭60) | 古山光久、綱河仁志 | 木元 哲也 | 割石 一郎 | 鎗 雄一 | 綱河 仁志 | 早川 勝己 | 木村均、白石智子 | 栗山(田村)美奈子 | | |
| 1986(昭61) | 古山光久、綱河仁志 | 割石 一郎 | 村田 弘信 | 田淵 達人 | 綱河 仁志 | 木村 均 | 堀江真道、斎藤昌子 | 椎木尾彰子 | | |
| 1987(昭62) | 綱河仁志、小川匡夫 | 村田 弘信 | 吉川 賢治 | 三戸 慶太 | 綱河 仁志 | 堀江 真道 | 黒澤友広、長谷川 | 森明美 | | |
| 1988(昭63) | 綱河仁志、小川匡夫 | 吉沢 朗 | 佐藤彰洋、酒井守彦 | 余田 正徳 | 今井(八谷)陽子 | 黒澤 友広 | 笠井秀憲、藤城 | 石塚郁子 | | |
| 1989(平1) | 綱河仁志、小川匡夫 | 佐藤 彰洋 | 田淵達人、三戸慶太 | 宮坂 大 | 青木 芳憲 | 今井(八谷)陽子 | 笠井 秀憲 | 廣江 | 三宮園子 | |
| 1990(平2) | 綱河仁志、小川匡夫 | 田淵 達人 | 三戸 慶太 | 青木 芳憲 | 佐々木 巧 | 伊東 敏之 | 鶴江 | 矢野美紀 | | |
| 1991(平3) | 綱河仁志、小川匡夫 | 中川 洋一 | 伊藤 英郎 | 米村 雅人 | 佐々木 巧 | 小暮 幸夫 | 鈴木(瀬崎) 裕子 | 新井理子 | | |
| 1992(平4) | 綱河仁志、小川匡夫 | 伊藤 英郎 | 熊坂智博、向井巖 | 佐藤 実 | 佐々木 巧 | 鈴木 実 | 三宮 園子 | 前田麻由子 | | |
| 1993(平5) | 綱河仁志、小川匡夫 | 青木 芳憲 | 宗像英英、森田将之 | 小林 義夫 | 佐々木 巧 | 早乙 女 | 矢口 仁美 | 金子真規子 | | |
| 1994(平6) | 綱河仁志、小川匡夫 | 千葉 秀起 | 米村、佐藤実 | 堀内 重威 | 佐々木 巧 | 岡 毅 | 木越 美和、新井理子 | 野口美香 | | |
| 1995(平7) | 綱河仁志、小川匡夫 | 佐藤 実 | 後藤正、川田博人、宮崎雄平 | 山田 裕二 | | 長尾 英純 | 斎藤 文夫、小出 | 田中 歩美 | | |
| 1996(平8) | 綱河仁志、小川匡夫 | 佐藤 正 | 高橋輝、山下 | 小林 和弘 | | 斎藤 文夫 | 佐藤宏、篠崎、金子 | 高杉 真奈 | | |
| 1997(平9) | 綱河仁志、関穀彦 | 高橋 輝 | 小林 義法 | 加藤 健志 | | 篠崎 一啓 | 野口美香 | 庭月 彩 | | |
| 1998(平10) | 関 穀彦 | 小林 義法 | 篠崎一啓、山田裕二 | 橋本 和也 | 若菜勉、田中寿子 | 小林 和弘 | 中村、赤川、佐久間理穂 | 石塚 智恵美 | | |
| 1999(平11) | 関穀彦、寺尾武之 | 山田 裕二 | 小川 佳史 | 杉原英雄 | 田中寿子 若菜勉 | 小林 義法 | 中村智恵子、山下芳 | 竹澤 | | |
| 2000(平12) | 寺尾武之 | 加賀谷 聡 | 高橋佳宏、神山友宏 | 保坂政希 | 田中寿子 若菜勉 | 庭月 彩 | 高澤、杉野 | 楠見 | | |
| 2001(平13) | 寺尾武之 | 杉原英雄 | - | 酒井真里 | 田中寿子 若菜勉 | - | - | 渡辺 | | |
| 2002(平14) | 寺尾武之 | 杉原英雄 | - | 梶田真里 | 田中寿子 若菜勉 | - | - | 谷本亜由美 | | |
| 2003(平15) | 布施明、八坂隆志 | 塩谷健二 | 稲葉光、新井良太 | 近藤勇太郎 | 田中寿子 若菜勉 | - | - | 西澤奈緒子 | | |
| 2004(平16) | 布施明、八坂隆志 | 塩谷健二 | 根本伸樹 | 炭川竜 | 田中寿子 若菜勉 | - | - | 越智奈帆 | 中学キャプテン | |
| 2005(平17) | 布施明、八坂隆志 | 根本伸樹 | 梶田真里、新井良太 | 内田開己 | 田中寿子 若菜勉 | - | - | 吉崎祺 | 中学(女子) | 中学(男子) |
| 2006(平18) | 布施明、八坂隆志 | 梶田真里 | 新井良太 | 高橋鶴樹 | 田中寿子 中野靖子 | - | - | 能登史佳 | 吉田里緒 | |
| 2007(平19) | 布施明、中澤三郎 | 近藤勇太郎 | 加藤真徳 | 志村正直 | 中野靖子 | - | - | 荒木ちひろ | 吉田里緒 | |
| 2008(平20) | 中澤三郎 | 内田開己 | 浜田将真 | 石原考芳 | 中野靖子 | - | - | 玉尾京子 | 山本瑞佳 | |
| 2009(平21) | 中澤三郎 | 浜田将真 | 内田開己 | 滝中健治 | 中野靖子 安藤直樹 | - | - | 吉田里緒 | 津田早苗 | |
| 2010(平22) | 中澤三郎、塩澤友樹 | 浜田将真 | 志村正直、佐藤秋彦 | 長生理平 | 中野靖子 安藤直樹 | - | - | 吉田里緒 | 長生理平 | |
| 2011(平23) | 塩澤友樹 | 浜田将真 | 志村正直、佐藤秋彦 | 長生理平 | 中野靖子 安藤直樹 | - | - | 山本瑞佳 | 森帆南 | 長生理平 |
| 2012(平24) | 塩澤友樹 | 志村正直 | 佐藤秋彦 | 長生理平 | 中野靖子 中野進一 | 吉田里緒 | - | 津田早苗 | 岩崎弥乃 | 清本和俊 |
| 2013(平25) | 塩澤友樹、梶田真里 | - | - | 長生理平 | 中野靖子 中野進一 | - | - | 竹津美咲 | 出原麻莉乃 | 翠川溪 |
| 2014(平26) | 塩澤友樹、梶田真里 | - | - | 金子健一郎 | 中野靖子 中野進一 | - | - | 加藤千聖 | 関谷優希 | 小菅太平 |
| 2015(平27) | 塩澤友樹、梶田真里 | - | - | 清本和俊 | 中野靖子 中野進一 | 津田早苗 | - | 岩崎弥乃 | 高橋楓 | 小菅太平 |
| 2016(平28) | 梶田真里、塩澤啓彰 | - | - | - | 田口智美、山内博人、中野進一 | 津田早苗 | - | 出原麻莉乃 | 木谷ののか | 高井良駿一 |

抜け、誤りがあると思います。ご指摘お願いします。(20161011小林改定)

トロフィー、賞状、記念パネルなど





～顧問の先生方の思い出～

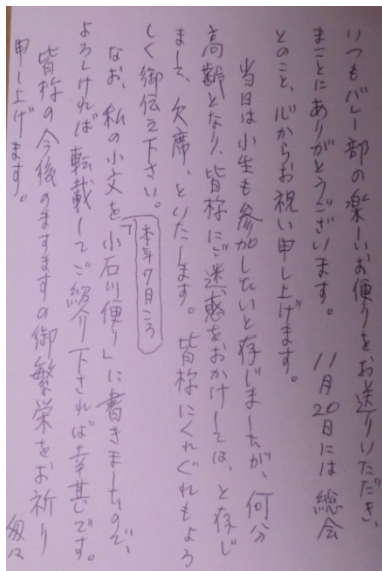
小石川の思い出

(紫友同窓会会報第 43 号 2015. 7. 21 よりバレー部関係を抜粋)

1967(S42). 4～1974(S49). 3 在任 国語 市毛 勝雄 先生

2. バレー部が強くなりました

小石川のクラブ活動は盛んでした。バレー部の練習に行ってみると、OB が 10 人ほど毎日来て、レシーブの基礎練習をしていました。夏の合宿の時に、練習時間の午前を基礎練習、午後は試合形式にすることを提案しました。練習が甘くなるという先輩もいましたが、やってみようということ



になりました。練習の中心はブロックの強化と、ブロード・スパイク（現在のバックアタック）でした。

その秋（1969）の都大会で小石川高チームは東京都 16 本の中に入り、念願の関東大会（水戸）に出場しました。大会参加チーム中で平均身長が一番低いチームでしたが、なんと 2 回戦を勝ち抜き、3 回戦で前橋商業（準優勝）に惜敗しました。

2 年目チームは、春の地区大会（1970）でお隣の強豪チーム早稲田実業を大接戦の末に破って優勝しました。3 年目チーム（1971）と 4 年目チーム（1972）はともに関東大会に出場しましたが、1 回戦で敗れました。

その後、OB 会で現役時代の中心選手が「ネットの上から思い切りスパイクをたたき込みたかった」と述懐するのを聞いて、選手は自分の身の丈に合った試合が楽しいのだと知り、クラブ指導の行き過ぎを反省しました。

小石川高校関東大会出場の記事

綱河 仁志 先生

1970 年に小石川高校に入学して男子バレーボール部に入部、大学時代はバレーボール部のコーチとして、また 1985 年から 1998 年までの 13 年間は小石川の教員としてバレーボール部に関わってきました。思い出すことは多々ありますが、関東大会出場の足跡を、記憶をたよりに綴ってみたいと思います。

小石川高校男子バレーボール部の最初の関東大会出場は 1969 年と聞いております。70 年卒の渡辺先輩、酒井先輩、佐伯先輩達の代です。東京都ベスト 8 で、出場を決め、水戸での本選でも 2 回勝って関東でベスト 16 に入ったということです。

2 回目の出場は 1971 年、竹山先輩、中村先輩達が 3 年のときです。ベスト 16 で出場を決めています。この年は東京開催で、東京代表は確か 18 チームだったと記憶しております。この時代は東京のチーム数が多く、通常の東京代表は 14 チーム、開催地代表として更に 4 チーム出場できました。この後数年して、東京代表が 12 チーム、開催地代表はプラス 2 チームに変更され、現在に至っております。このときは私も 2 年生で出場し、残念ながら 1 回戦で敗退してしまいましたが、貴重な経験をさせてもらいました。

3 回目の出場は翌 1972 年で、私が 3 年のときでした。東京ではベスト 16 でしたが、関東大会に推薦されて出場を果たしました。2 年連続で関東大会に出場したのは後にも先にも（先はまだわからない！）このときだけです。このころの関東大会出場校の決め方は、ベスト 8 は即決まりですが、残りの 6 校は東京都高体連の役員による推薦で決められていました。この点もその後改正され、ベスト 8 を除いたベスト 16 の 4 チーム×2 によるリーグ戦で出場校が決まるようになりました。因みにこの年も 1 回勝って関東大会ベスト 16 になりました（なぜか 1 回戦はシードされていた）。

4 回目の出場は 1974 年です。3 年生の古関君が獅子奮迅の活躍をして出場を決めたと聞いております。この時の 2 年生には一昨年亡くなられた溝口俊郎君がおられました。

5 回目の出場はちょっと間を措いて 1980 年、加藤勇之介君達の代です。東京ベスト 8 に入って出場を決めました。

6 回目は 1983 年で、割石君、菅野君（弟）達が 3 年生のときです。4 回、5 回目の出場決定の試合は、私は直接みたわけではないので詳細はわかりませんが、6 回目の出場を決めたベスト 8 決めの試合は、私が見た小石川高校の試合の中でも、ベスト 1 に挙げたいほどのエキサイティングな試合でした。錦城高校に 4 点差をつけられてマッチポイントを握られたところからひっくり返して勝ち取った栄冠でした。因みにこのころの試合はラリーポイント制ではなく、サーブ権がなければ点が入らない点数制だったので大逆転も可能だったのかもしれない。

7 回目の出場は 1986 年です。鎗君、吉沢君達が 3 年生のときです。私が小石川高校に赴任して 2 年目の春でした。このチームはそれまで悉く支部予選で敗退していました。関東予選で宿敵上野高校にマッチポイントを取られながらも逆転勝ちし、最後の関東決めのリーグ戦でも小山台高校にマッチポイントを取られながらも逆転勝ちするというミラクルな試合の連続でした。おかげで寿命が縮まりました。

8 回目は 1994 年で、佐藤正君、吉田君達が 3 年生のときです。このときは小石川高校の校舎改築にもあたっていた時期で、体育館が使えず、小学校の体育館を借りたりしながら、練習場所を確保するだけでも大変でした。さらに私は 3 年の担任で、学年の進路を担当していたので、目が回るほどの忙しさでした。外の体育館で練習が終わった後、学校に戻って仕事をするのが日常化していました。関東予選でベスト 16 に入り、最後の関東決めのリーグ戦の相手は安田学園、高輪高校、電大高校でした。東京開催だったので 3 位以内に入れば関東出場が決まるという状況でした。高輪、安田には負け、電大に勝てば出場が決まります。電大は 1 月の大会で負けた相手でしたが、サウスポーエースの吉田君の足がつるというアクシデントに見舞われながらも何とか雪辱を果たし、関東大会出場を勝ち取りました。私のバレーボール人生のなかで最も感動した瞬間でした。

これを最後に小石川高校男子バレーボール部は関東大会から遠ざかってしまいました。私の知る範囲では関東大会出場 8 回ということになります。都立高校に限れば、小山台、北園に次ぐ 3 番目の記録だと思います。最近の高校バレー事情では、足立新田と上野が都立の雄で、関東大会の出場回数も増えているようです。特に足立新田はベスト 4 に入っており、春高バレー出場も現実味を帯

びてきています。

思いっくまま、冗長に書いてしまいました。関東大会のプログラムが残っていればもっと正確な資料が作れたのですが、私の手元には 1986 年のプログラムしかありません。どなたかお持ちならば、集めてみたい気もします。小石川中等教育学校になってからは男子生徒の数も減り、チームが構成できない時期もあったようですが、中学部の生徒さんたちがなかなか良い結果を残し始めているようで、9 回目の関東大会出場を目指してぜひ頑張ってもらいたいものです。この 4 月から顧問の先生に豊島高校から滝沢先生をお迎えしたと聞いております。滝沢先生は東京都高体連の役員でもあり、先生の指導の下、関東大会出場の栄冠が得られるよう、心より祈っております。

小石川中等教育学校 女子バレー部

中野 靖子 先生

1 期生を迎えた年は、高校生も教員もどうしたらいいか手探りでした。コートや練習時間は今まで通り、そこに中学生が加わる…場所は狭いし、レベルは違うしうまく練習ができるか、部活動が運営できるか不安でした。

しかし、高校生たちは、何も知らない中 1 である 1 期生に様々な事を丁寧に教えて行きました。中学生からすれば、高校生の先輩からの一言一言は強く心に響いたことでしょう。できることから一生懸命取り組んでいました。準備、挨拶、声。特に 1 期生は明るく元気でみんな大きな声をしっかりと練習していました。

ネットの高さはまずは高校で。パスやレシーブ、サーブ練習などは可能です。サーブ練習の時には中学と高校のボールが入り乱れますが、手に持つとすぐわかるのできちんと自分のボールを選んでそれぞれ練習していました。教員もレシーブやスパイクの時の球出しに中学と高校のボールが混ざっても、手の感触でどちらのボールかすぐわかり、さっと取りかえることもできるようになりました。技術的なレベルや人数に合わせて工夫すれば様々な練習ができることがわかり、高校生だけの時とは違った充実した部活の時間を過ごせたのではないかと思います。練習試合も中高のある女子校へ同時にお願ひしたり、男女で中学にお願ひするなど様々な形で取り組みました。

初めての中学の試合は、平成 18 年 10 月文京区の新人戦に出場。7 人全員一年生。とにかく、一番声のでて一番楽しそうなのが小石川でした。翌平成 19 年 1 月の冬季大会で文京十中に勝ったのが初勝利。2 月の 1 年生大会では、なんと 3 位になりました。高校生も中学生もそして教員もそれぞれに一生懸命だったように思います。平成 20 年 6 月の夏季大会では文京区大会で勝ち進み、初めて第 4 ブロック大会に参加。3 年間で着実に力をつけました。私も初めてのブロック大会の引率に、いつになく緊張したのを覚えています。

こうして、小石川高校バレー部の良き伝統を引き継ぎつつ、今の中等教育学校バレー部も活動を続けています。今年の中学チームは新人大会、春季とブロック大会に出場。7 月の夏季のブロック大会出場をめざし練習に励んでいます。高校の大会でも、3 期生は都ベスト 3 2 へ進出など輝かしい成績を残しています。

そしてその成績以上にバレー部の年齢を超えたつながりは、今も昔も変わりません。卒業生が休

みの日には練習や試合を見に来てくれたり、コーチとして参加してくれています。また、五中会からボールやかご、ユニフォームなどの支援などしていただき、大変感謝しております。今後も小石川バレー部が発展していくことを心から望んでいます。

選手／指導者で携わる小石川バレー部

梶田 真里 先生

056の梶田真里です。小石川中等教育学校に赴任して、4年目になります。私がいた頃とは、雰囲気などは変わりましたが、校舎は私が在学中とほぼ同じでとても親しみを持っています。

現役時代は、勉強はほどほどに、バレーボールに朝から晩まで打ち込んでいました。月曜がオフで、平日は朝練・昼練・放課後練。体育館使えないときは、六義園のまわりを走ったり、溝でサブカットの練習をしたり、校舎内で階段ダッシュや動物トレーニングをしたりしました。休日は基本的には休みなく練習、練習試合、大会とバレー三昧でした。試合成績は、ベスト32にも届かず悔しい思いをしました。

その思いが、今は原動力になっています。廃部寸前だった男子バレー部を復活に導いてくれた塩澤先生と共に指導し、中等教育学校になってからの卒業生もようやく2代を輩出してきました。

中学生は都大会にも出場する機会が増えてきて、高校生は大会で勝つことができきて、やっとう古豪小石川が復活してきますかね。それをしっかりサポートできるように、OBとして一教員として頑張っています。ぜひとも練習にも大会にも足を運んでもらえると、可愛い後輩たちの勇敢な姿が見られるかと思えます。

～現役時代の思い出～

臉とじれば・・・

飯島 敏宏（昭和 26 年卒）

省みると、青春という、人生にとって最も鮮烈な時を過ごしたのが、小石川高校バレー部の頃ではなかったでしょうか。今でも、ふと、臉とじれば、ほろ苦く、滑稽で、甘酸っぱい青春の日の光景が、つい昨日のような鮮やかさで甦ってくるのです。

五中に入学したのが、昭和 20 年 4 月。本格的授業も始まらない 13 日が、あの大空襲でした。3 月 10 日の空襲で本郷の我が家を焼け出され、仮住まいしていた大塚で二度目の罹災を命からがら生き延びて、まだ焦炎消えやらぬ道を歩いてたどり着いた駕籠町でしたが、校舎は、僅かに講堂の壁を残して焦土と化し、グラウンドに抉られた大きな穴の淵に整列した当番の先輩たちが、「陛下御下賜の木銃（教練用）を持ち出さなかった」という咎で、配属教官らしき軍人に打擲を受けている光景でした。そして敗戦。教科書の大部分を黒く塗りつぶして、にわか民主主義に取り舵いっばいの世の中になりました。

それから三年、同期の某君に勧誘されて、全くの初心者でバレー部に入ったのです。まだ食糧難（学校で先生がトラックを仕立ててイワシやサンマの買い出しに行き、生徒に配給した！）で、衣料も切符制、白い短パンが手に入らずに、履き古しの長ズボンを切ったカーキ色の半ズボンと、ごわごわした繊維が肌をこするランニングに鉢巻というデビュー姿でした。試合はほとんど屋外でしたが、粗いコンクリート舗装むき出しのコートという学校もあって、抽選で漸く手に入れた運動靴のゴム底が、眼に見えて減ってしまうのを心配しいしい試合するという、情けない有様でした。（練習時は裸足というすごい先輩がいた！）。練習のボールは、輪番修理の継ぎはぎで、誰かが糸でなく銅線（！）で繕ったいびつで重いボールをレシーブして突き指したこともありました。当時は、九人制ですから、ポジションが固定されています。密かにアタッカーを狙ったのですが、遅れて入部して背も高くない僕は、当然バックです。「いや、実は、バックになり手がなくて、適当なやつはいないかと物色してた網にかかったのさ」と、ある実直な先輩が教えてくれたのです。でも、辛かったという思い出は、ありません。憧れるような先輩はいましたが、苛める先輩はいませんでした。

五中から小石川高へ、という学制改革の狭間にいたのが僕たちの期です。高三の春、いまだに五中の名に拘る先輩に抗して、ユニホームの五中をイメージしたVを、小石川のKに変更するという尖った行動もありました。当時大ヒットした映画「青い山脈」の主題歌「古い上衣よ、さようなら、さみしい夢よ、さようなら」を実践して、「小石川高のプライドを！」と行動したのが裏目で、ある意味で、鬼っこの期になってしまった感があります。

しかし、バレー部に、コペルニクス的大転回をもたらしたのは、男女共学です。なにしろ、戦時徴兵制度下で、目指すのは東大にあらすして海軍兵学校、と決めて入学して、戦況激変でやむなく陸軍幼年学校に願書を提出、うかつに盛り場をうろつけば「兄ちゃん、予科練へどうだい？」と勧誘された男子校育ちの僕達の次の学年から女子が入学してきたのです。男子校だった先輩たちはけっこう軟派で、しきりに女学校のバレー部と接近して、コーチを務めたり、交流試合もしばしば行

われていたのですが、僕らの代には、下級生に女子部員が急増したのですから、それも沙汰やみです。

一方、個人的には、教室の壁に手書きの壁新聞を創刊して自作の大衆文芸小説を連載したり、復刊した伝統の校内誌に、思春を描いた文芸を寄稿したり、情操的成長は滞りようもありません・・・さて、ここからが、つまらない男が、いまだ心の中に温めている、青春時代のほろ苦く、甘酸っぱい思い出になるのですが、紙数に限りがありますので、一つだけ・・・

三年の夏、これで引退という都大会だったのでしょうか、これと言った戦績のなかった僕らが、突然強くなって勝ち進んだのです。しかも、地道にバックレフトを勤めていた僕に、なんと、3連続サーブ・ポイントという奇跡が起こったではありませんか。次に廻って来たチャンスにも、2連続。「あいっただぞ！止めて行け！」の初めて聞く光栄な敵方のヤジに続いて、「飯島さん、しっかりー！」という女子の声が耳に入ったのです。60年も経った今でも、その声が、僕の代表作「金曜日の妻たちへ」の主題歌、小林明子「恋におちて」の美声に劣らぬ鮮明さで、甦ってくるのです。あの時、声をお掛けになった方は、とっくにお忘れでしょうけれど・・・

私がバレーボールを始めた頃

近藤 誠男（昭和27年卒）

私が都立五中（旧制「都立第五中学校」）に入学したのは、終戦の翌年・昭和21年4月です。駕籠町の校舎は戦災で焼失していたので、入学した校舎は滝野川にあった軍の兵舎（第一造幣廠・現王子総合高校の場所）でした。そしてその年の11月には文京区同心町（現・文京区立茗台中の場所）の校舎に移転しました。ここは当時廃校になっていた実業補修学校兼尋常高等小学校で、地下1階地上3階の鉄筋校舎でしたが、戦時中に戦災で罹災し人々が一時この校舎で暮らしていたこともあり、荒れ果てていました。

私がバレー部に入ったのは、五中の2年生の春です。同じ小学校から入学した友達の2年上の兄がバレー部にいたので、誘われて二人で入部しました。

当時のバレーボールは屋外のスポーツでしたが、同心町の校舎の校庭は硬いアスファルトなので、校庭では練習はできず、校舎に付属した講堂兼体育館で練習をしましたが、天井は低く、広さも9人制のコート（21m×10.5m）も満足に取れないような状態でした。

昭和22年4月から実施された633制によって、昭和20年・21年に入学した私たち中学生は、都立第五高等学校の併設中学校の生徒ということになりました。こうして私たちは高校2年生になって、新制中学校の卒業生が入学してくるまで下級生がいないという変則的な生徒になったのです。併設中学校のチームというのはいなかったもので、高校2年生になるまではバレーの練習のときはいつも球拾いばかりでした。

新制中学校の卒業生が入部してきたとき、一番驚いたのは、練習のときにジャージというものを着ていることでした。私たちは真冬でも練習のときはランニングシャツと半ズボンが当たり前と思っていたので、これが旧制と新制の違いかなと思ったりしました。

高校2年生の夏休みには合宿練習をしました。場所は千葉県館山市の県立安房高校のグラウンドでした。宿舎は同校の柔道場でした。食事は町の食堂でしたが、戦後の食糧難の時代でしたので、戦時中からの配給制度による外食券を持参しての合宿でした。

あのころは試合数も少なく、大会は確か年間3～4回しかなかったと思います。レベルが低かった

と言われればそれまでですが、都立高校が強かった時代でもあります。ちなみに昭和26年の春の都大会では、私たちが2回戦で惜敗した都立第3商業高校が優勝しています。

70年近くの昔を思い出して、とりとめもなく書きましたが、年寄りの繰り言としてご勘弁ください。

男子排球部志賀高原合宿の頃

小田 弘夫（昭和29年卒）

1952年という昔のことである。あの終戦の8月15日から7年しか経っていない。私は小石川高校2年生16歳だ。2年先輩の若い々々近藤監督が春に就任。キャプテンの水野基君と私・名目マネージャーが合宿所（宿）を借りるために、御茶ノ水女子大学の教職員室に向かった。そこは、小石川高校の同心町の借り校舎から間もなくながら、れっきとした女子大の本校舎である。夏休みだったか日曜日だったか記憶が無いが、キャンパス（当時はこんなカタカナ語は無かった）は人気（ひとけ）が無かった。玄関で靴を脱いで、磨き上げた板張りの廊下をはだし（素足）で教職員室に向かった。私は、小学校6年から共学であり特定の女子生徒と親しかったりもした。しかし、女子大は大人の女性の園であり、男子禁制という感覚を持っていた。つまりそういう所へ、エスコートもなく男の二人連れがずかずか入っても良いものか？

合宿所はそれどころではなかった。女子大生専用の山小屋である。場所は志賀高原、確か発哺温泉近い適度に林に囲まれた大部屋式ロッジだった。スキーが主目的で、夏は女性らの利用が少なかったのだろう。自炊である。近藤監督は、女子排球部の部員を炊事係として、避暑旅行させるという自由な発想の先輩でもあった。

今にして思えば、男子禁制の女の園によくぞ泊めて下さったと思ったのは、我々男子高校生の勘違い的思い上がりで、女子大学の感覚では、高校の男の子達は大人の男子とは見られて居なかったのだろう。可愛いものだったのだ。ロッジにはちらほらと、女子大生が泊っており、我々の炊事係らは妹分として受け入れられたに違いない。

肝心のバレーボールのコートである。お茶大ロッジから石ころだらけの何とか自動車が走れそうな道を500m??位行くとバス停と店があったか小さな集落?があり、そのとっつき（下界から来れば、集落の奥のはずれ）に格好の広場があり、そこにコートを作ったのだ。小石交じりのクレで一面取れる。問題はネットを張るポール。穴を掘って立てるなどありえない。支線ロープを張って、支線の端はフックを地面に打ち込む。近藤監督、よくぞそこまで下見をされました。

言うまでもなく、当時の排球＝バレーボール（クラシック）は9人制。パスは現今ビーチバレーでOKな、顔の前に手のひらをハの字に構えてボールを掴まないように弾く。膝、腰、肩甲骨、肘、手首が連動して初めて自在にパス出来るようになる。現代の6人制のアンダーハズはやるな！と「怒られた」。このパスが一人前、サッカーのリフティングが無限に続けられるように、2人で3人で・・・パスが無限に続けられること。サーブはテニスと同じに2本打てる。1stは横向きで親指の付け根を使ってトップスピンをかける。2ndはアンダーハンドで狙いどころだけ。中学時代いたずら好きの優等生を通してきた私は、この単調な合宿に一興を添えるべく、めっちゃめっちゃ高

く々々 2nd サーブを打ってみた。結構レシーブ難、無回転だと上から揺れ々々落ちて来る。

ここで、排球部の「部長」先生が登場する。土橋先生である。部長先生は、部活の内容の達人ではない。土橋先生がレシーブしようとして、太陽に輝く頭髪が無さそうな頭で高所からの揺れ々々ボールをはじいてしまった。これはいやが応でもみんなの記憶に残り、秋の対外試合で1勝を目指す小石川高がピンチの時、なんで小田はあの高々 2nd サーブを打たんか！と水野キャプテンが檄を飛ばした。

この頃、部長土橋先生の役割をどれだけの生徒が、また親たちが分かっていたであろうか。近年、部活のある種の行き過ぎや、生徒、学生、あるいはプロ・アスリートまで、個人・団体で不祥事が報道されるようになった。1964年の東京オリンピックの頃、そのような報道は無かったように思う。実際不祥事があって報道されなかった、暴かれなかったと、私は思わない。行き過ぎや不祥事はたゆまぬ努力によって抑えられ、団体や社会が健全に保たれたのだ。部活動の専門的分野の指導が監督の役割であるとすれば、全人的心身の健全性に関することは、生徒・監督を総合して管理し正しい道から逸脱しないよう心を配る「部長」の使命がそこにあった。土橋先生ありがとうございました。高校生から50年も経って、年齢をとって初めて気づく部長の恩、親の恩にも等しい。そして、この仕組みを作り維持した校長以下の教師陣の情熱に改めて賛辞を贈りたい。

2年そこそこの部活で、私は生涯の基礎となる肉体と精神の核を作ることが出来たと思っている。確かに、川崎や藤沢の工場内で、昼休みのひと時円陣パス・アタックで遊んだり、部課対抗の試合もしたりした。しかし、22歳から給料をもらう生活になって、団体（チーム）競技はその生活に馴染み難く、今上天皇のご成婚もあって公式テニスを生活習慣とするようになった。もっと言えば他のあらゆる趣味は封印しテニスだけをである。しかし、スポーツを生活の一部とする主義は小石川高校のバレー部に始まる。サラリーマンを脱してから、ゴルフを始めたが、テニスも続けている。私のゴルフもテニスも、小石川高校でテニス部だった同級生に負けることはない。

私と小石川高校とバレー部

攝待 吉雄（昭和30年卒）

私が小石川高校に入学したのは昭和27年(1952)4月、卒業したのが昭和30年(1955)3月でした。07期卒業生になります。この高校生活三年間を思い出して書いてみますが、なにしろ半世紀以上前のこととて記憶のあいまいなところをご容赦願います。

高校入学前、卒業したのは北区立飛鳥中学校で第3期生でした。いわゆる新制中学校ですが、卒業当時、西ヶ原の校舎は建設途中で、2、3年生だけが入り、1年生はまだ滝野川の第一造兵廠跡の校舎にいました。入学した都立小石川高等学校は駕籠町校舎を焼け出され同心町の校舎に入っていました。同心町へ来る前は一時飛鳥中と同じ第一造兵廠跡にいたそうですが、これは飛鳥中の創立以前の事です。同心町校舎は空襲で焼けなかった堅牢な建物で、現在は文京区立茗台中学校となっています。

当時の制度では住所によって進学できる高校が決まっていました。北区は板橋、豊島、文京と同じ第4学区に属し、この4区内にある高校のみ受験可能でした。私は母子家庭だったものですから中学を出たら就職するものと思い、進学する気はありませんでしたが担任の先生の勧めもあり、進学コースに入ることになりました。それまでは身近な高校としては自宅に近い北園高校(旧都立九中)しか知らなかったのですが、同じ学区内に小石川高校というのがある、これは元の五中でこの方がいい学校らしいというので、そちらを志望して入ったのです。

同心町校舎は春日通り沿いにありましたから、目の前を都電が走っていました。私は家の近くの荒川車庫始発早稲田行きの32番系統(現在の荒川線)の西ヶ原四丁目停留所から大塚駅前まで乗り、大塚駅前始発錦糸町行きの16番系統に乗り換えて文京区役所前で降りれば小石川高校は目の前でした。同じ線路を17番系統の池袋神田橋間の電車も走っていました。当時の都電の混雑はひどく、私は朝乗るとき右手右足だけで電車にぶら下がって次の新庚申塚まで行くことがよくありました。今ならとても認められないことなのでしょうが、当時は普通でした。

入学するといろんなクラブが入部の勧誘をやっていました。私は中学時代なにも運動部活動をしていませんでしたが、なにか運動はしたいと思っていました。しかし部活動というのは課外の時間を使います。私は中学校の先生のお世話で学力テストの採点のアルバイトをすることになっていましたから、そちらを優先しなければなりません。部活動の余裕があるものかどうか分からなかったものですから、最初は何もやりませんでした。その後、日本育英会の奨学金を貰えることになり、アルバイトの要領も分かってきてどうやら部活動の時間も取れそうだと思います、5月ごろバレー部に入部したのです。

アルバイトと言えば、当時は教室の清掃の仕事がありました。毎朝早く来て教室の掃き掃除をします。月に一回は休日に大掃除があり、この時は机を片側へ寄せて、板張りの床全面に油を塗ります。仕事が終わってから集まってアンパンを頂くのが楽しみでした。ちなみに当時の机は椅子と一体構造の木製で、かなり重いものでした。アルバイトとしては冬季に朝ストーブに点火する仕事もありました。教室の前方に一つあるストーブに紙と薪を使ってコークスに点火するのです。清掃の仕事にあぶれたらストーブの仕事に回るのです。

運動部の中でバレー部を選んだのは自分の体力を考えた結果です。広いグラウンドを走り回るのは無理、狭いコートでもバスケットボールはきつい、バレーボールなら何とかかなりそうという理由でした。中学時代にはバスケ部はありましたがバレー部はなく、クラス対抗試合に出たくらいの経験しかありませんでしたから、入部当初は新入部員同士のパスの練習が主でした。これなら特にコートを使うことはなく、狭い校庭でもやれます。当時のパスは五本指を使って、額の前で受けるのが鉄則でした。どんな低いボールでも、その下に滑り込んで胸の前で受けるのがいいレシーブだと言われました。しかし、更に遠いボールには飛び込んでアンダーハンドで取らざるを得ません。これを五本指で取ると殆どホールディングを取られるので、難しいレシーブでした。現在のような組手のアンダーハンドパスは練習した記憶がありません。

同心町校舎のバレーコートは体育館兼用の講堂の中でした。舞台に向かって右半分がバレー、バス

ケットボール用コート、左側がその他の運動部でたしか柔道部と卓球部が使っていました。元が高等小学校の講堂ですから天井が低く、バスケのゴールも張り出しています。コートは一面しかありませんからバレー部とバスケット部交代で使います。バレー部が月水金ならばバスケット部が火木土というように。授業は五日制でしたから、土曜日は半日フルに利用できました。ところで五日制というのは小石川高校が実験的に試行していたのだそうで、私達が卒業した後はまた六日制に戻ってしまい、3年間ずっと五日制だったのは私達の学年が最後だったそうです。土日のうち一日はバレー部に使い、一日は勉強するという非常に合理的な制度だと思っていました。

当時のバレー部員は3年生になると大学受験に専念するため殆どやめてしまい、2年生が主将として活動していました。私が入部した時もすでに1、2年生だけで、総勢十五、六人だったと思いますが、それも段々に減ってしまい、夏の合宿を迎える頃には十人そこそこだったように思います。その合宿にもお金が要るので私は参加しませんでした。その夏休み中だったと思いますが、練習の機会を増やすため屋外コートを駕籠町に作ることになりました。当時の駕籠町校地にはまだ焼け落ちた講堂の残骸と焼けた校舎のコンクリート基礎がそのまま残っており、焼けなかった水泳プールとグラウンドとテニスコートだけが使える状態で、時折体育の時間に利用していました。バレーコートを作ったのは講堂の東南側で、講堂に平行に場所を決め、部員が持ち寄ったシャベルを使い、金網を買って作った篩で土をふるって石やガラスの破片を取り除き、部員の実家から買った材木でポールを立てました。講堂の片隅が更衣場所です。折角作ったコートですが、頻繁に利用したという記憶はありません。放課後に同心町から駕籠町まで行くのは無理だし、雨が降ったら使えないし。

体育の授業では駕籠町に行くことがありました。電車賃のある者は16番か17番の電車で大塚仲町まで行き、乗り換えて20番で駕籠町まで行きました。私などは学校前の坂を下り、植物園の塀の穴をくぐって園を横切り、また塀の穴を抜けて林町の方へ出て駕籠町まで歩きました。当時の都電料金はたしか10円ではなかったかと思えます。

当時の対外試合は春季及び秋季の東京都大会が主でした。他にも何かあったような気がしますが、そんなに多くはなかったと思います。残念ながら当時の練習日誌がなくなってしまったものですから正確なことは分かりません。私が一年生の時は二年生に水野さんという右のエースストライカーがいて、たしか3回戦まで勝ったことがあったように思います。それが最高の戦績だったと思います。私が初めて試合に出たのはレギュラーメンバーの一人が突然来られなくなり、急きょ出場させられた時でした。当時は9人制ですから、9人はいないと試合ができません。試合会場に行ってもベンチに残るメンバーはいつもごく少数で、交代可能要員はせいぜい1、2名ではなかったでしょうか。入部半年くらいの私もバックサイドを守ったのですが、初めてサーブを打ったとき、折角ファーストサーブが入ったのにラインクロスを犯してしまったという痛切な記憶があります。当時サーブは2本打つことができました。

2年生になって3年生が退いてからは、私は右のキラーを務めましたが、公式戦で勝った経験は一回しかありません。それも続く二回戦では終盤に脚がつってしまい、殆どジャンプできないという情けないアタッカーでした。ちなみに当時のアタックはキルとタッチでした。二年生の夏休みには松本で合宿もしましたが参加したのは2年生5名だけでした。それでも私達の学年は3年生の春の

大会、たしか6月まで活動して引退しました。当時は一年浪人するのは当たり前という時代で、現役合格などはあまり頭になく、少しでも長くバレーを続けたいという気持ちでした。当時の部員数は卒業アルバムの写真から見ると、3年生6人、1、2年生11人で、やはり9人揃うのがやっとという状態だったようです。

当時の大会の会場は全て屋外でした。コートが沢山取れて効率がいいからでしょう。都立三商や明大中野などが会場になることが多かったと思います。そして雨天の場合にはあらかじめ決めてあった体育館に変更になります。私達は屋内で練習しているものですから、屋外はどうも苦手でした。

当時はバレー部も貧乏で、ボールを買うのもままなりませんでした。部員から部費を徴収することもなく学校からおりの予算だけでやっていましたから、私達のチームではボールを修理して使うのが当たり前でした。修理というのはすり減って表皮の切れた部分に表から皮を縫い付けるのですが、専門の業者がいました。当時のボールは牛革を縫い合わせた表皮の中にゴム球が入っており、空気入れポンプで膨らませて入口チューブを縛り、表皮の開口部に押し込んで、皮ひもで絞めて開口部を閉じた継ぎ目ありボールでした。従ってボールのメンテナンスにはひも通しとポンプが必需品でした。この表皮の縫い目の近傍がすり減るのです。ボールは全部で5、6個しかなかったと思うのですが、満足なボールは一つしかない時期がありました。それも全体にすり減って少しふくらんでしまい、室内でのみ使うものですから黒光りしていて、大会で試合ボールを出すときにはとても恥ずかしい思いをしました。

バレー部を引退したあとは受験勉強に励んだ訳ですが、一年浪人してなんとか東大に入れました。東大バレー部には小石川で一年先輩の村瀬さんがいて勧誘され、私もバレー部に入りました。東大バレー部には「バイトとデートは練習に優先する」と言ってくれる先輩がいて、私もバイトに励んだためついにレギュラーメンバーに入ることなく終わってしまいました。当時のメンバーとは現在も親しく付き合っています。大学卒業後は日本鋼管（現 JFE スチール）に入社したのですが、ここは実業団バレーの強豪で大学の優秀選手が大勢いました。それでも社内対抗のバレーには私も課の代表チームに参加し、10年くらいは活躍しましたが、40歳を過ぎてからはテニスを始めました。バレーのように突き指をする心配はなく、バレーと似たような広さのコートで現在も走り回っています。このように終生の運動習慣の端緒となってくれた小石川高校バレー部には本当に感謝しています。

9人制と6人制

白坂 武男（昭和39年卒）

私がバレーボールを始めたのは中学に入った時でした。都内の中学で校庭はアスファルト（コンクリート？）で、エンドラインの1メートル後は校舎と云う大変なコートでした。その中でスライディングをさせられたり、練習後にうさぎ跳びをコート3週（確かコートは11メートル四方？）とか、今の親が聞いたら卒倒するような環境でした。運動着も今のようなジャージの運動着なんかは無く、皆ランニングシャツに白の短パン（トレパン）、当然身体は傷だらけ。それも今思うと

懐かしい思い出です。小石川高校に入ったら、校庭は「土」でえらく広い校庭だと感激したことを覚えて居ます。学校の敷地のほぼ中央にあった体育館（床が傾いていました）の横にバレーコートがあって、そこで練習をしていました。新しく出来た体育館でバスケット部が練習をしていて何時も羨ましく横目で見えていたものです。校舎と校舎の間にあった校庭では軟式のテニス部が練習をしていました。理研側に有ったグラウンドでは、サッカー部、ラグビー部、軟式の野球部が練習をしていました。良くもケガもせずにやっていたものです。

当時のバレーは9人制で、フォワード、ハーフ、バックと夫々3人ずつと云うのが一般的な配置でした。因みに、今の社会人の「東レ」は当時「東レ九鱗会」と云っていました。ブロックもネットを越えてはいけないというルールでネットの後方から手を押し出して、ネット上でボールを手に当ててブロックするという戦法だったことを覚えて居ます。ハーフの両サイドはほぼアタック専門、ハーフセンターとバックは守備専門と役割が決められていました。これがバレーボールだと思っていました。

不確かですが2年（3年？）の秋から日本で初めて6人制が取り入れられて、高校の大会にも採用されはじめました。これが世界でやっているバレーボールなのだと初めて知り、ビックリしました。戦法もパスの仕方も変わってしまい、アンダーハンドパスも手ではなく腕に当てるとの事で、腕の何処に当てたらいいのかも分からない状況の下で練習・試合が進められました。当初は手を握って親指伸ばして上向きにそろえてそこに当てていました。今は腕が当たり前ですね。ローテーションして前衛に位置した者が攻撃すると云う事で、全員が攻撃、ブロック、守備という実に平等な役割を受け持っていました。今迄は専門的な役割しか持たなかった者が全てをこなさないといけないと云う事で、大変戸惑いました。

でも、我々が日本で採用された6人制の高校の大会での初めての試合体験者だった事は今でも憶えて居ます。

当然の事として、大学も実業団も全て6人制に移行してゆきました。現在では6人制が当たり前になっていますね。9人制で残っているのは「ママさんバレー」位なのでしょうか。

日紡貝塚（今は有りませんが）の世界での169連勝そして東京オリンピックで女子が金メダル（大松監督）、ミュンヘンオリンピックで男子が金メダル（松平監督）を獲り、バレーボールの最盛期ともいえる時代が有りました。バレーボールをしていた者として誇らしい時代でした。現代スポーツは「フィジカル要素」が大きく影響するようになっている様です。

所で、小石川高校のバレー部に入って本当に感激したことが有ります。それは先輩方がコート上では怖い存在でしたが、コートを外れると「人対人」で後輩と接して下さったことです。先輩方から見れば子供扱いだったのでしょう。これは当時小石川高校の校風の様でした。もっとも他の部では違った部も有りました。

これはその後の私にとって大きな生き様の糧になっています。

同期では、高橋キャプテン、長野君（故人）、田代君、永野君、根岸君、松沢君、米田君、片桐君、市倉君、鈴木君と私で11名でした。私たちを指導して下さいました当時の監督（松本先輩、茂木先輩）はじめ諸先輩そして同期の皆さんには心より感謝しております。



卒業後は女子バレー部の監督として1年間務めさせて頂きました。男子の監督は同期の長野君でした。私は、良い監督ではなく出ると負けに近い戦績だったと思います。唯、一つだけ覚えて居る試合が有ります。当時全国レベルで有った、「八王子実践高校」と当たった都大会です。相手の身長は全員165センチ以上、わが方は多分平均身長が155～156センチ、身体の大きさは倍くらい違いました。試合が始まってから我チームが頑張って「8対8」まで進みました。

その前辺りから他校の選手たちが集まってきてコートを囲み、驚きの眼で見られました。先に相手方がタイムを取り、監督がエーススパイカーをひっぱたいていましたが、これにはビックリしました。それからは圧倒され始めて完敗でした。負けたことは大変悔しい事でしたが、進学校である都立の全員背の低い小さな選手でもここまでやれたと云う事は皆さんにとって大きな喜びでと大きな思い出で有ったのでは無かったかと思っています。当時の現役のメンバーは、(全員旧姓) キャプテンの青木さん、梶原さん、熊沢さん、松井さん、中山さん、岩下さんと全員同期の6名でした。彼女たちとは何年かに1回ですが今でも交流が続いております。

扱、高校時代の思い出となったかどうかは分かりませんが、9人制と6人制の移行期、それに何にも増して小石川高校のバレー部に在籍しましたことは、良き先輩・良き同期・良き後輩と知り合う事が出来、私にとって人生の素晴らしい経験であった事は間違いありません。皆様方に感謝申し上げます。

最後になりましたが、OB会である「五中クラブ」の幹事の皆様及び今回の「創立70周年誌」の発行の労を取って下さっている皆様に感謝しておりますと同時に校名は変わりましたが、変わらぬ「五中クラブ」の益々の発展を祈念しております。

バレーボールと私

里吉 忠昭 (昭和40年卒)

バレーボールとの出会いは中学生になった私の思春期のちょっと苦い思い出です。学校の授業で習ったのが最初で、体育の先生から「お前少し上手じゃないか」とちょっと褒められてウキウキしてしまいました。クラブ活動に入ろうかと考えたことも有りましたが、「女子のバレーボール部はあるが、男子はない。」といわれました。バレーボールをやりたかったのは、実は「バレーボールが面白い」という事だけではなく、女子バレーボール部に憧れの女性達が入っていた、ということも有り、動機が少し不純でしたので、それ以上のことはできませんでした。

当時の私は女性については引っ込み思案で、目当ての人に話しかけなどできず、顔を見ることも恥ずかしかったのです。

そんなことで悶々として何もせず、出来ずにいる内に、卒業となり、別々の高校に進みました。数年前、同級生がミニ同窓会の幹事役を務めてくれて、10数名の集りでしたが、それこそ50年ぶりに再会しました。でもやっぱり恥ずかしくて言葉がすこし上ずっていました。

高校に入ってから、いの一にバレーボール部に入りました。

今でも覚えているのは、背の高い中津井さんと奈良さんがパス練習をしている風景です。これが「刷込み」の心象風景です。

楽しい高校時代でした。

入部当時はまだ9人制のバレーボールでしたが、2年生になると6人制に移行しました。私達のチームは「出ると負け」で、確か5校対抗戦では1セットも取れなかったと記憶しています。

でも本当に多くの良き先輩、同期の9人の仲間、多くの後輩に巡り会うことが出来ました。

顧問の本多先生にも大変お世話になり、お正月には、同期の人と毎年のようにお宅にお邪魔して、「君達はボトル1本持ってきて、10本位空けて帰る」といわれました。

今でも家でストレッチなどする時は、小石川バレーボール部時代の準備体操をベースにして20-30分程ウォーミングアップしています。

その時つらつら思いますのは、40sの皆さんのこと、楽しかった時のこと、合宿の辛かった時のことです。

バレーボール部の益々の発展を祈念します。

バレーボール ありがとう！

宮地 隆夫（昭和40年卒）

小石川バレー部が70周年記念の年度に70歳になるとは何かの因縁でしょう、約55年間もお世話になったバレーボールは私の人生の友達であります。その切掛けとなったのは小石川バレーボール部でした。中学時代はバスケットを部活としていた関係で、ごく自然に高校でもバスケット部の門を叩きましたが、部の雰囲気になじめず、1年の夏休み前に退部しました。親父からは文武両道が男の姿だから、どこかの運動部に必ず入るようにいわれ、夏休み明けに里吉からバレーボール部を紹介され、早速、部活を見学に行きました。そのころは2年生の高橋先輩がキャプテンで、1年生は里吉、鈴木、山本、岩間、丸山、小林、井上だったと記憶しています。バレーは中学時代に体育の時間で遊んだきり、やさしそうだがなかなか手ごわいが初日の印象でした。

特にほかのスポーツに興味があるわけでもなく、雰囲気が良かったので、数日後に入部を決めました。そのとき同時に石橋も入部しました。それ以来バレーとの長い付き合いが始まりました。本当に里吉にはありがたいと思っています。東洋の魔女として有名になった日紡貝塚が世界に飛躍する時期でしたが、その時は知らず、偶々私がバレーをやり始めた時と重なっていたようです。週3-4日の屋外コートでの練習に明け暮れ、2年の春からレギュラーとして9人制バレーの試合に参

加出来るようになりました。

活躍したかは全く覚えていませんが、多分アタックはふかしくったのではと思います。当時は9人制から6人制への移行時期で、夏の富士見高原での合宿、水を飲むな、足腰を鍛えるのはうさぎ跳びと、現在の指導方針とは全く逆でした。1週間部員全員しごかれ、正に這って東京に帰ってきました。その年(1963年)の秋からわれわれ2年生主体で試合に出るようになりましたが、コーチも6人制の知識が少なく、セッター3人、アタッカー3人と今から考えると、どうなっているの?です。特に前衛にアタッカーが1枚の時はセンターから打たねばならず、当時のトスはただ高く上げるだけなので、ブロックされるかふかすか、たまにポイントを稼ぐことあった程度。勝てるわけがありません。

実際2年生の時は、5校対抗(日比谷、上野、開成、麻布、小石川)、支部大会、弁当を持って行ってもすぐ終わり、さびしく帰ったものでした。3年(1964年)の時はあの東京オリンピックで、女子は金メダル、男子は銅メダルとすばらしい成績でしたが、我々は相変わらず出ると負け、それでも支部大会予選の1回戦は何とか勝てるようになりました。

同期は、里吉、小林、岩間、丸山、井上、山本、鈴木、石橋、宮地の9人。岩間と石橋は鬼籍にはいり、現在は7人となりましたが、ゴルフ、麻雀、旅行、飲み会と楽しんでいます。

私の高校時代のバレーは不完全燃焼だったこともあり、大学で体育会バレー部に入部し、4年間同期の仲間と苦楽を共にして、高校時代の仲間と同じように今でも付き合っています。大学の6人制を後輩高校生に教えようと、大学時代は夏合宿には3回参加し、現役との交流を深めました。卒業後は商社勤務でしたが、ここでもバレー部に入り5年ほど楽しみました。やはりバレー仲間とは退職後もゴルフ、飲み会が続いています。

高校仲間とはOB会である五中クラブとは別に我々が昭和40年に卒業したこともあり、40年代卒業の後輩達と40'S(フォーティーズ)という会を作り、本当に良く付き合わせ頂いております。インドに6年弱駐在したときも、何と小林、1年下の梅島は5回(?)も遊びに来たし、彼ら以外にも多くの40'S仲間がはるばるインドに来てくれました。

本当にありがとうございます。今いる多くの友人は高校、大学、会社のバレー部関係者で、私からバレーを取ったら、人生は全く違った展開になったと思っています。五中クラブは70周年記念となりますが、そのうちの55年間は現役、OBとして参加しており、考え深いものがあります。今も元気で仕事等が出来るのも小石川高校のバレー部に入部し、バレーボールの魅力にとっぴりつかったお蔭だと思っています。

本当にお世話になっていますし、これからもよろしく願います。

半世紀前の思い出

小林 偉昭(昭和40年卒)

新設の滝野川中学の1回卒業生として小石川に入学して、すぐバレー部に入ったと思います。卒業後OBとして女子コーチを仲間の鈴木とやりました。現在五中クラブの会長としてOB/OGの連携の維持・発展や現役への貢献を進めています。

現役時代の思い出を脳みそのどこかから引き出してみようと思います。目標を10としました。思い出すのも加齢の身としては楽しくもあり、試練にもなります。それでは今から半世紀前の現役の話について紹介しましょう。

ポジション決定 (思い出 1) : 私の代は 9 人制から 6 人制移行時の世代。コーチ世代は 9 人制しか知らない。そこでポジションを決めるとき、私の記憶では、そこに並べ、身長順にアタッカーとトサーにする、との選択がありました。私を含め、山本までが残念ながら数センチの身長差でトサーとなりました。私が 169 cm で、山本は 170 cm ちょっとあったのではないかと思います。卒業まで 3 人アタッカー、3 人トサーで戦いました。残念ながら、戦績はいまいち（全く）でした。卒業後に山本は電通大のバレー部でアタッカーとなり、OB チームで活躍しました。小林は基本ができていないので、腕力だけでのアタッカーで、たまにボールを打たせてもらいました。

校庭が主戦場 (思い出 2) : 今は体育館でやるのがバレーボールと思っている人が多いと思います。しかし、私の現役時代は、校庭の土、砂利に親しむ環境でした。しかも、ランニングシャツが全盛で生傷が絶えなかったような気がします。当然試合も校庭でした。

本多先生 (思い出 3) : 英語の補修を練習のない日だったか、定時後やっていただいた。本多先生には、卒業以降もいろいろとお世話になりました。正月には本多先生宅を訪問し、いつも皆で飲みすぎるほどの騒ぎで楽しませていただいたとの記憶が残っています。

ローリング (思い出 4) : 最近はスライディングなどという私にはできなかった飛び込み胸使いボール拾い等をする人が増えています。さらに足を使っても良いようで、外人は特に長い脚をうまく使って守備範囲を広げているようですね。何を言いたいかというと、水野先輩がおられ、その奥さんが合宿に来られ、奥さん仕込みで厳しくローリングをやらされたことの思い出です。ありがとうございました。

高いトス (思い出 5) : 上野高校での五校対抗試合は校庭でなく、体育館での試合だった。天井が低く、高いトスでしか打てないアタッカーに高いトスを上げると天井に何度も当たってしまった。悔しかった。

昼弁当 (思い出 6) : ほとんど 1 回戦で負けてしまうので、次の試合のラインズマンをしなければいけません。それを終わってもすることがないので、自宅に帰ってお弁当を食べることがほとんどでした。

合宿の缶詰 (思い出 7) : 何のことかわからないかもしれませんが、私たちの合宿は 1 週間で、その間の食事の栄養をいかに確保するか、牛乳代をどうするかとか、先輩からの引継ぎで合宿前にはいろいろと活動をしました。先輩の会社や自宅に伺い（襲い）、寄付金をお願いしました。先輩の会社の缶詰を安く？譲っていただいたことも何回かあったと思います。

便秘 (思い出 8) : 現役時代、合宿で緊張している身体から、何に恐怖を抱くのか、出ないのです。体力維持のため食事は取るのに出ないのです。これには困りました。一生懸命牛乳を飲んで、身体の流れを良いようにしたけれど出ないのです。出るのはほんのコロんとしたものだけ。しかし、人間の体は立派ですね、数日はどうにか耐えることができました。後半は雰囲気にも慣れ、運命からの脱出もできたようです。人間の身体は、素晴らしいですね。

万歳三唱 (思い出 9) : 今でも引き継がれているか分かりませんが、何かがあると必ず万歳三唱をしていた記憶があります。合宿の後、先輩が駅で別れるときにはすばやくホームに整列してバンザイ！バンザイ！と大きな声でお礼をした記憶があります。当然、卒業後の飲み会などでも誰かが抜けるたびにバンザイをしました。あるときにはタクシーの中から池袋周辺で万歳を叫んでいたと先輩に言われます。記憶にはないのですが。

下駄で通学 (思い出 10) : 下駄を知っている人はいますか。私が現役のころは普段下駄をはく人が

まだいました。カッコつけか(五中児としてのバンカラを狙っていたのか)通学の時は当たり前で、合宿などへも下駄をはいて行きました。私だけでなく同期仲間の山本も下駄の愛好家でした。

我が代は9人でした。現役時代だけでなく、卒業後、社会人になってから、いい年のおじんになってからも声をかければ、すぐ集まります。残念ですが既に2人があの世に出かけています。残り7人もそろそろ古希の声を聞いたので本人の肉体管理、健康持続に頑張るよう仲間で声を掛け合いながら、これからも長く団結していきたいと思っています。今後とも小石川のバレー部と一緒に楽しんでいきたいと思っていますので、バレー部の継続・発展をよろしくお願いします。

70周年を迎えて

森田 力夫 (昭和42年卒)

勝ちたい。勝ちたい。現役時代、私たちが主力となった1年間は、公式戦で1回戦突破が1~2回だったと記憶しています。

勝利は何よりうれしい、楽しいものです。別に体格が劣っていたわけでもない。全然練習をしなかったわけでもない。私も含めて、個人個人の能力はちょっと劣っていたかも知れないけれど…。

卒業1年後、男子のコーチを拝命しました。その時のことをふりかえってみますね。

前年度の現役のレベルが高く、並ぶのは兎も角、こりゃ大変だ。でも、最低2回は勝ってほしい、そうすれば、何年後、何十年後かに彼らにとって少しは良い思い出になるかなあと考えていました。(公式戦は全てトーナメント戦、負ければ終わり。)

練習方法の根本を変えていく。試合だ~試合だ~(気合も必要だけど気合だけじゃね)。幸い、土曜日午後の体育館には1チーム出来るくらいのOBが毎週来てくれましたので、OBとの試合形式の練習。他校との練習試合。練習試合でも負ければ悔しいもんです。それが肥やしになったかどうか、公式戦の勝ち負けにこだわれば、私の想像をはるかにまでとは言いませんが、かなり超えていました(下級生の水口君がいたおかげ?)。前年度から6~7年、小石川高校は大会では一目(半目かな)置かれる存在になっていました。

てなわけで、現役生諸君、折角、貴重な時間を使って皆が集まって練習。だったら、勝とうじゃありませんか。アマチュアスポーツは勝つと楽しいですよ。でもね、勝つだけがクラブ活動のすべてでないことは、皆さんも承知していますよね。期待していますよ。

顧問の先生、若いOBの方々にも何卒よろしくお願いします。

駕籠町を想起して

渋谷 一行 (昭和42年卒)

「駕籠町」という言葉は、今は「千石」という名前に代わってしまいましたが、私にとりましては極めて懐かしい町の名前です。私が昭和39年から42年までの3年間通った都立小石川高等学校があった町であります。駕籠町の交差点には、都電の駕籠町という停留所が、角には本屋が、更には昼食を食べに通った「キッチンかご」などがありました。いつもは100円余りのナポリタンを食べ、小遣いに余裕があるときには少し高めのドライカレーを食べました。

小学生から野球少年でありました私は、入学後何か運動部に入りたいと思っていましたところA

組のクラスメイトの美浦君に誘われてバレー部に入部しました。バレーボールは中学生時代に体育の授業でやったぐらいでしたので、かなり不安を抱いての入部でした。美浦君とペアを組まされオーバーハンドパスの練習を始めましたが、なかなか100回まで続けることができませんでした。夏の屋外での合宿（長野県富士見高原）等を経て9月になってようやく100回連続パスができるようになりました。美浦君には大変迷惑をかけたと思います。この頃から少しずつバレーボールが面白くなり練習にも熱が入るようになりました。

昭和39年は「東京オリンピック1964」が10月に開催された年でもあります。開会式の練習に都立高校の生徒が動員され、何回も国立競技場へ往復させられ、確かソビエト連邦の選手団の代わりをさせられた記憶があります。第2次世界大戦敗戦後わずか19年で開催される東京オリンピックを成功させようと日本中が沸き立っていました。まさに「戮力同心」の状況でした。聖火リレーでは、ちょうど生物の授業（八重樫先生）中に小石川の先輩が聖火ランナーとして国道17号線沿いに駕籠町の交差点を通過するため、クラス委員が先生に交渉してくれ、駕籠町の交差点で見学できました。

バレー部に入部した1年生も途中で退部したものがおり、最終的には森田力夫、渡辺栄三、美浦隆、鈴木修一、安部素直、そして小生の6名が3年生までクラブ活動を成し遂げました（写真1（1966年撮影））。



写真1



写真2

コーチは長野俊治先輩と高橋利弘先輩でした。我々の世代は他の世代より多く練習をしたと自負しておりますが、強くなることはできませんでした。1回戦は勝つのですが、必ず2回戦で敗退ということの繰り返しでした。通常は3年生の5月の公式戦を最後に引退するのですが、我々は引退しきれずに秋の深まる11月まで小石川Bチームとして公式戦に出場しておりました。次の世代（小石川Aチーム）には大変迷惑をかけてしまいました。最後までバレーボールを続けました6名のうち渡辺栄三君は急逝しましたが、他の5名は小生を除いて第2の人生を謳歌しております。数年前にはコーチでありました高橋利弘先輩を囲んで銀座で楽しく会食をしました（写真2（2013年撮影））。

バレー部を途中退部した人とも、大学時代にバレーボールで対戦したり、社会人になって偶然職場が一緒になったりした縁で、今でも仕事上の頼み事をしたり、されたりの関係が続いています。この文章を書きながら来し方を振り返っておりますと、H.G.Wellsの「The Time Machine」（小石川時代の英語の教材）が思い出されてきました。Time Machineに乗って1964年に戻ることができたら……。

エース松下久雄君の代

岸田 隆夫（昭和 43 年卒）

私たちの代は、小石川高校に昭和 40 年に入学して、昭和 43 年に卒業し、凡そ 2 年半バレー部で活動しました。3 年先輩の里吉さんがメインコーチでした。

次の代は東京都のベスト 4 に入ったりしましたが、私たちはコート決勝まで行くと喜ぶ程度で決して「強い華の代」ではありませんでした。キャプテンは松下久雄君で、全くのワンマンチームでした。彼は当時（今もかも知れませんが）名門と言われた文京区の文林中学校でバレーボールをして、私たちの代では唯一きちんとアタックが打てる唯一のエースアタッカーでした。打点が高く、スナップの効いたスピードは試合会場でも群を抜いていました。

それだけではなく、私たちの代のコーチの役目を負っていました。私たちの代は中学校で全く経験していないか、経験のある福島一郎君でも中学校で普通にやった程度でした。松下君は私たちにサーブやレシーブの仕方を手取り教えてくれました。上手くできないと、「うさぎ跳びでコート一周」を言い渡す厳しいコーチでもありました。もっとも、グラウンドのコートでは、本物のコーチから「うさぎ跳び」を言い渡され、松下君は本当にグラウンド一周を果たした時は驚いたものです。

練習の後、セブンアップを飲んだり、巣鴨の北口の甘いもの屋でお饅頭や餡蜜を食べたりしたことを覚えています。私たちの代の中でレギュラーにならなかったメンバーは、良く勉強ができ、東大や東工大などに現役で入りました。

大学生になりますと、松下君がメイン、私がサブコーチになり、福島君が女子コーチになったと記憶しています。松下君は早稲田大学で現役のプレイヤーになり、途中から私が中心になってコーチをやりましたのが、水口君の代です。梅島「総監督」がおられましたので、コーチの仕方などを教えていただきました。自分でも本を購入して、コーチングと基礎体力の付け方について学び、選手たちにやってもらいました。それが良かったのか、支部大会で優勝することができ、選手に胴上げしてもらい、さらに、北園高校の藤田監督から「短期間に良いチームを作り上げましたね」と褒めていただいたことが良い思い出です。

多くの先輩方と親しくさせていただき、人生の先輩としてお手本を見せていただきましたことに感謝しています。さらに、私よりも若いですが、酒井君、水口君にはプレーを通して人間観を教えてもらうことができ、今でも立派な男と敬意を持っています。

なお、ご存知の通り、松下久雄君は若くして亡くなりました。社会人になってからも三越でプレーしていたそうです。「バレーの虫」の松下君のご冥福をお祈りいたします。

昭和 42 年夏の白馬合宿

佐伯 英一郎（昭和 45 年卒）

もう半世紀も前になる。高校 1 年の時、生まれて初めて合宿というものに参加した。

集合場所の新宿で合宿から帰ってきた卓球部のクラスメイトに会う。「ものすごいきつかった」という話を聞きバレー部はどうだろう、という不安がよぎる。行きは夜行電車で新宿駅の集合は夜遅くであった。下駄をはいてきている先輩にびっくり。1 年に「週刊誌を集めてこい」という指示

が出る。到着した列車の網棚には結構週刊誌が残っており、かなりの数を集めることができた。あまり見たことのないエロ雑誌もあり行きの列車は退屈しなかった。

翌朝、白馬に到着。宿舎は普通の民家であった。

少し仮眠をして、起きてみると、2年の根岸さんが、日にちを縦に、早朝・午前・午後を横に書いた大きな表を作り壁に貼っていた。この時は何のためなのかわからなかった。

コートまでランニングでいく。走っても走ってもつかなかった。どのくらいの距離があったのだろうか。午前、午後毎日2往復した。行きのランニング中に、斉藤さんが「加納、早い」と言うと、ペースが落ちた。心の中で「斎藤さん、もっと言って」とつぶやいていた。

コートは田んぼの中の土のコートであった。サーキットトレーニングも慶応ヨット部のトレーニングを参考にしたものが入り入れられ結構きつかった。白馬の日差しは強く、パスの時、太陽がまぶしいのがつらかった。OBはサングラスをしている人がいた。

二年生がフォーメーション練習をしているとき、普段は1年は球拾いなので休憩できるのだが、合宿はOBがたくさんいるので1年は交代でレシーブ練習をした。4年生と呼ばれるOBに初めて会う。来年我々のコーチになる代らしい。4年生3人による1年一人のレシーブ練習が毎日繰り返された。合宿ではこれが一番きつかった。酒井（と渡辺？）は2年のフォーメーション練習に入っていたのでこの苦しさを知らない。浅子はボールを急所に当てられ泣いていた。特に森田さんは黒いランニングとパンツを着ていて怖かった。後で聞いたが森田さんは現役の時「鬼の森田」と言われたらしい。渋谷さんは「蛇の次に怖いのが森田だ」と言っていた。森田さんが自分たちのコーチになったらいやだなと思った。

3年生は優しかった。パスやレシーブも丁寧に教えてくれた。福島さんはローリングを、松木さんはスライディングを実際にやって見せて教えてくれた。「1年にもスパイクを打たせてやろうよ」と言ってくれるのはいつも3年生だった。スパイクは松下さんと岸田さんが教えてくれたがこのころはうまく打てなかった。

帰りもランニングである。「舍利当」は食事の準備のために、ネットを片付ける前に急いで走って宿舎に向かう。和雄は皆で帰りのランニング中に、突然あぜ道に入り、シダをとって戻ってきた。走りながら好きなシダを探していたようだ。

風呂は狭かった。一年は最後でお湯があまりなかった。水で体を洗ったような気がする。食事はどんなだったか全然覚えていない。土の上でローリングやスライディングをするので、肘、背中、腰、足にすり傷が絶えない。薬は赤チンとヨウチンだけ。ヨウチンの方が早く治ると先輩から言われ全員ヨウチンを付ける。これが痛い。塗るときは交代で息を吹きかけながら付ける。息を吹きかけるとずいぶん痛みが和らいだ。確かに早く治った気がする。

枕押しという夜の競技があり、毎年1年が予選をやり代表を決め先輩に挑むらしい。私が1年の代表となった。挑んだ相手は誰だったのか覚えていない。当然負けた。翌年までカラクリを知らなかった。

もう一つの「しごき」はコーチの根岸さんの夜のエロ話と春歌。とにかく面白く、寝なきゃいけないと思いながら寝れなかった。合宿がきつかったのはこのせいもある。和雄が結構春歌を知っていたのにはびっくりした。これ以降、合宿で「夜のしごき」が定常化した。少し反省すべきかもしれない。大学生や社会人になって、この時覚えた歌はずいぶん余興に使わせてもらった。

4日目頃から疲労が蓄積してくる。元気になると思ってか、大島君が飲んだ牛乳本数の記録を作る（1日10本？）。根岸さんの表は終わった練習に大きな×を付けるためのものだった。きつくな

った頃に残りの練習が少しずつ減っていくのはうれしかった。

最後の頃はもうバテバテであった。女子バレーとコンパをやったような気がするが定かではない。帰りの道筋も記憶にない。東京に帰ってから高熱を發して2～3日練習を休んだ。

この合宿は私の65年の人生の中で肉体的に最もきつかったと思う。しかし、最も面白かったかもしれない。また、役に立ったかもしれない。

小石川高校関東大会出場の記録

綱河 仁志 (昭和48年卒)

(顧問の先生の思い出を参照)

小生のバレーボール—今は昔の物語

武馬 友義 (昭和48年卒)

♪ 僕は五中の五年生 (ツンツン) 胸にネクタイ金ボタン^{注1} (ツンツン) —甚だしく中略—、人生
終わり目五十年 (ツンツン) 諸行無常の響きあり (ツンツン) ♪—五中ツンツン節より

注1: 小生の入学当時の小石川の標準服(「制服」ではなかった)は、紺の金ボタンスーツに紺のネクタイであった。学ランの人もいたし、上級生になるとネクタイを替えたり違う色のズボンに替えたりしていた。勿論、小生もそれにならったが。構内は教室も含めて土足。革靴が一般的だったが、夏には下駄の人もいた。

もう62歳になる。歌の当時とは異なり、現在の人生の終わり目は急速に長くなり、80歳を超えている。しかしながら、過去の事象は火星より遠い忘却の彼方にある様で、その多くはブラックホールに吸い込まれてしまった。

脳の中に海馬という組織があり、記憶を司っているが、加齢に伴い委縮し、「ボケる」、否、「痴呆」となる、否、「認知症」を発症する。現在は前二者の様な差別用語を使ってはいけない。今、ブラックホールへ落ちつつある記憶を必死に拾い集めこの文章を書いている。

小生は何故バレーボールを始めたのだったっけ？

小学校高学年から警察の剣道場に通っていたので、自然と中学の部活にも入ろうと思っていた。はたして、中学校に剣道部はあった。が、防具がなかった…。バドミントン部に誘われなんとなく入部した。が、練習は体育館ではなく毎日校庭。風が吹くとシャトルが揺らぐ、戻ってくる。原っぱでやるバドミントンと変わりがない…。そんな中バレー部から誘われた。多分、それだけ、だった様な気がする。

これが、大げさではなく人生を変えた。良くも悪くも。

小石川に入ると迷わずバレー部に入部した。初めての6人制であった。オヤジOBがいっぱいた記憶がある。

「マンジャ」という綽名の先生がいた。本名は…ブラックホールの中。1年中ジャンパーを着ているため万年ジャンパーの短縮形「マンジャ」が綽名となった由。英語の先生だった？

1年生の我々も「マンジャ」であった。この場合は万年ジャージだが。朝7時頃には登校していたと思う。部室で着替える。部室とは名ばかりで、当時は体育館のギャラリーの角にあった。何処

からか拾って来た様な棚と机、目隠しのベニヤ板。棚や机には一年生は着替えを置けない。先輩諸兄の場所が暗黙裡に決まっている。金ボタンとネクタイをバッグにしまい隅に置く。ぼつぼつと他の1年が集まってきてネットを張り、とにかくスパイクの練習をする。1時限開始ギリギリまでやっているの、授業中もず〜とジャージ。

♪ 朝は眠いの起こされて、朝飯食わずに学校へ、1時間目が終わったら、無心に弁当食べるのよ♪-受験生ブルースより

歌の文句そのままに、1時限後の10分の休み時間に弁当をかき込む。2時限目と3時限目の休憩は20分と少々長い。パンを3つ買いに走り、1つを食べる。3時限後の10分休みに残りをほおぼる。4時限終了とともに体育館へダッシュ。ネットを張り、誰よりも早く場所を確保し、またまたスパイクの練習をする。なぜなら...

放課後の本番の練習は概ね以下の様であった。

ランニングと準備体操、パスと対人レシーブ。この後、1年生はボール拾い人と化す。スパイク、フォーメーションでのレシーブ練習、試合形式練習、サーブ練習、すべてボール拾い。最後に1年生も参加できる「楽しい」練習メニューが待っている。曰く、ウサギ、大ウサギ、アヒル、アザラシ(なんと動物の名前ばかりの筋トレか！しかも外でアザラシをやると靴がボロボロになってしまう)、腕立て、腹筋・背筋、海軍体操(語源の出所不明)、空気椅子、などなどなどなど。帰りにやっと、胸にネクタイ金ボタンになる。

2年生になってからもマンジャだったかの記憶はない。2~3年の記憶は連続性を欠いているか、欠落している。

男子コーチ、女子コーチと2回もコーチをやったので、大学生になっても小石川にばかり来てバレーボールをやっていた。

女子コーチをしていた時のチームに、「はっちゃん」というニックネームの娘がいた。はっちゃんはめちゃくちゃレシーブが上手い。右でも左でも、前方でも顔面近くの高めのボールでも、強打も軟打も、兎に角拾いまくる。だが、残念なことに身長が低かったせいもあり、スパイクはからっきしであった。そのため当初はピンチサーバーからレシーブ要員という起用法であったが、この抜群のレシーブ力を、試合を通して使えないのはもったいないと思っていた。考えた。

セッターには1枚固定セッターというフォーメーションがある。バックセンターも1枚固定にしたらどうだ？そうすれば彼女の群を抜くレシーブ力を、試合を通して使うことが可能となる。勿論フォワードはその時は2枚になってしまうが、要は味方コートにボールが落ちなければ相手の得点にはならないのだ。

はっちゃんは、フォワードにいるときでも、サーブが打たれるや否やバックセンターにポジションをとる。守備範囲を決めた。アタックライン後方及び両サイドラインから1.5m内側、すなわち、 $6m \times 6m = 36m^2$ を彼女一人に任せ、「この範囲のボールは、はっちゃんのもの、他の選手は手出し無用」と指示を出した。彼女は期待に応じて拾いまくった。他の選手も守備範囲が限定されるため、チーム全体としてのレシーブ力は格段に上昇した。

いつの頃からかは知らないが、リベロという役割の選手が出現した。ひょっとしたら、いいやきつと、試合の時の我々のフォーメーションを見ていた誰かがこれをパクり(松平氏との噂がある)、ルールとして取り入れたのではないのか？特許か実用新案を取得しておけばよかった！(この類は申請してもだめだけど)

相手サーブ時に、はっちゃんがたまたま、フォワードレフトにいた時がある。あまりにもいいサーブレシーブが返ってきたせいか、セッターは、つついレフトオープンにトスを上げてしまい、すぐさま「いけねっ！」と声を出したことがある。はっちゃんは、まさかトスが上がってくるとは思っていなかったの、一瞬躊躇したが、果敢にスパイクを打ちにいった。相手ブロックはなぜか2枚付いた。思い切り打ったスパイクは、手の芯ではなく指先にあたり格好のフェイントとなり、相手コートに落ちた。多分彼女の唯一のスパイクポイントではないかと推測する。

現在、はっちゃんは、歯医者さんとして虫歯菌との戦いのフォワードにいる。

特注：この話は、筆者の入れ歯治療時の厚遇を期待しての「よいしょ」ではないことを付け加えておく

社会人になってからは、多少ではあるが、会社や得意先でバレーボールをやっていた。しかし意に反して、というか予想通り、暴飲暴食と運動不足が勝利して、デブった。

45・6歳の頃だったと思う。子供の小学校のPTAバレーボール大会に出場したことがある。無論、素人ばかりだったが、我がチームには3人玄人がいて優勝候補と目されていた。もう一つの優勝候補チームにも玄人がいて結構いいスパイクを打ってきた。試合中、敵がレフトから仕掛けたフェイントにバックライトから、何の迷いもなくフライングレシーブで飛んで拾う、はずだった。頭の中に焼き付いていたイメージでは、楽に拾えるはずだったのに、ボールは遥か彼方に。しかもS機長の様な上手いランディング^{注2}ではなく、下手糞な機長のその様に、ドスンと右胸部から着地した。痛かった。我慢して全試合に出場したが、3日たっても痛みが引かないので、整形外科でレントゲンを取ったら肋骨を骨折していた。

それ以来プレイは止めた。

注2：S機長は筆者のコーチの代であるが、どんな天候状態でもスーッと着陸を決める。OB数人でグアム行の彼の便に乗ったことがあるが、着地の全員での採点結果は9.95であった。ちなみに機長は現役時代、フライングレシーブはしなかった（出来なかった？）そう。フライングレシーブしなくともボールは拾えるのだ、との本人談。機長は今日も大空を飛んでいる。

その後も五中クラブにはほぼ毎年顔をだすが、ボールには触っていない。ただ見るだけ。あと、飲み屋で昔の仲間と「あの頃」を語るだけ。酔いが進むにつれて、しばしば、どの代が最強であったかで口論となる。^{注3}

注3：69年卒は東京都ベスト4、70年関東ベスト16、71年支部大会優勝、72年関東出場、我々73年関東ベスト16どの代もそれぞれ強かった、わけても…。ここから口論が始まるのだ。

今は昔の物語。色不異空空不異色色即是空空即是色、Let it be. Let it go. 羯諦羯諦…。

小石川中等教育学校 女子バレー部

中野 靖子（昭和61年卒）

（顧問の先生の思い出を参照）

小石川高校バレー部の思い出

鎗 雄一（昭和62年卒）

まずはバレー部創部70周年おめでとうございます。その一時代に籍を置かせていただいたものとして、大先輩小林会長より「思い出」寄稿のお話をいただきましたので、筆を取らせていただきます

す。

(かなり長編になってしまいましたが、お目通しいただければ、幸いです。)

私が小石川高校バレー部の存在を知ったのは、中学3年生で初めてその校門をくぐって観戦した小石川伝統の創作展の2つ上の先輩の招待試合でした。小学校からバレーを始めた私は、女子と違って、当時まだ小学校の男子バレーはそれほど人気もなく、チーム数も少なかったのと、同級生にスーパーエースが2人いたので東京新聞杯東京都3位、中学校は何とか都大会出場もできたので、当時、高校ではもう少し上のバレーをやってみたいという気持ちでおりました。幼稚園から一緒の吉沢君と小学校、中学校で一緒にバレーをしていて、「小石川って強いみたいだよ。観にいこうよ。」と誘われ、彼と一緒に観戦に行ったことが、私の運命を変えてくれました。

「小石川＝勉強ができる学校＝バレー部はそんなに強くない!？」と勝手に思い込んでいましたが、全く違うチーム、伝統がそこにはありました。

今の現役生や若いOBOGの方々には想像つかないと思いますが、旧体育館は天井に鳩が住み着いていて、そこに鳥よけのバルーンがぶら下げてあったり、練習中にその糞が落ちてくることもあったりしました。汚いコンクリート床で卓球台があり、錆びた手すりのギャラリーと呼ぶのには程遠いそのギャラリーから観戦したあの試合が私の原点だったのかもしれない。

当時、先輩方それぞれすごかったですが、特にレフトエース2人は「目から鱗」で、その2人が倉内・吉川さんでした。倉内さんは中学校の時、弱小チームで負けてライズマンをやっている1年生の私の前に現れた間近でみる強豪校文京十中の3年生スーパーエースでした。その人が小石川にいる、もし入れればあのスーパーエースと一緒に練習できるんだ！これで私の志望校は決定しました。頑張っ勉強して小石川に入学しなければ！！…小石川に、バレー部に入ること目標に受験勉強、入試を乗り切って合格できました。

合格後、2年上の女バレーの木村さんが中学の先輩だったので連絡し、男バレー部長・網敷さんをお願いしていただき、今はできないかもしれませんが、入学前の春休みから練習に参加させてもらいました。レベルの高い練習と人間味のある先輩方、OBがこんなに練習に参加される学校ってあるのかな？というのが最初の感想でした。

目標は「関東大会出場」！！近いところでいうと3年上の菅野靖・割石さん達の学年が東京都ベスト8で関東大会に出場しているというのを聞かされていました。

OB 大学生コーチ制度の確立、限られた短時間内練習の内容の濃密さ、複雑なサインがあったり、コンビでする攻撃、現在では普通の攻撃になっていますがバックアタックやジャンプサーブ…とても新鮮でした。その2年上の先輩方は、予選コート決勝で競り合い、当時、東京都ベスト4の東洋高校をかなり追い込みましたが、惜敗引退されました。この時、コーチだった一橋大生・谷口さんにベンチ入りさせてもらい、その東洋戦にピンチサーバーで試合に…今まで人生の中で数本の指に入るくらい緊張し、全く周りが見えず、作戦タイムの笛が鳴っているのも気づかず、サーブを打ってしまった記憶があります。

そのあと、初めて見た「観戦にいらしていたOB」の数の多さ、引退への餞のお言葉、引退される先輩方の涙に「関東」にかける思いが伝わりました。絶対、関東に行くぞ！と思いを馳せました。

代がわりして1年上の先輩達の代になりました。当時、メインコーチは横浜市大医大生だった菅野晃靖さん、頼れるオールラウンダーのキャプテン高橋明宏さん、2支部選抜でも名門私立の選手を抑えて表エースだったスーパーエースの吉川さん、サウスポーの黒沢さん…

とても強く、見栄えのするチームで「都立の星」といわれ、試合前のスパイク練習では、「小石川のスパイク練習始まるよ！」とギャラリーに他校の生徒たちが集まってくるほどでした。

未熟ながらそのチームと一緒にプレーさせていただきました。

都立最強と言われ、東洋高校に敗れはしたものの支部大会2位、都立対抗優勝、5校対抗優勝国体都予選ではベスト4までいったチームでした。最後の関東予選は前年度春の高校バレー東京代表の高輪高校とフルセットの熱戦を演じましたが、最後に一步及ばず引退されました。私はこの代と一緒に引退してもいいと思うくらいの先輩方でした。しかし、先輩方に「来年はお前が引っ張って行け！！」と。おんぶに抱っこだった私を鼓舞してくださった先輩たち、その夢＝「関東大会出場」の分も！！心新たに夢を追いかけることを誓いました。

また、当時6月第3週日曜日には定例の五中会があり、代々の諸先輩方がいらっしや、現在と同じように午前中体育館では汗を一緒に流し、その後、紫友会館で近況報告など1年生には本当に緊張する会でした。小石川バレー部の伝統に触れる大切な日だったと記憶しています。

そして、夏合宿は、私が1年生のこの年から群馬片品村「梅田屋」が定番宿舎となり、20年近く続いたのではないのでしょうか？その練習内容は以上に驚かされたのは、現役男子女子一緒に行くのですが、その参加されるOB・OGの出席される人数が…決して少なくない現役数でしたが、その数は現役をはるかに上回っていました。普段の練習にもたくさんのOBの方々がいらしてくださるのですが、初めてお目にかかる先輩、名だたる先輩…すごかったです。

これを見て、懐かしく思われる私近辺の方々、でもやっぱり一番きつかったのは、体育館までのあの1日3回登る坂ですよね？「そう、そう！」という声が聞こえてきそうです。

最終日前夜の「まくら押し大会」などのレクリエーションも小石川バレー部の伝統を感じる演出でした。OBになってからも、楽しみで毎年のように合宿に参加していました。

さらに毎年、1月4日恒例の新年会。体育館、紫友会館に何のお知らせもせずに、年明け早々OB・OG皆さんが集まっていらっしゃるというに驚きました。

少し脱線してしまいましたが、話を戻します。

自分の代になってキャプテンの大役を拝命しました。当時、慶大生・木元さんをメインコーチ、早大生・割石さんをサブコーチに自分が3年生の時は各学年10人以上、30人以上の部員がいました。

1つ上が強かっただけに、周囲の目は「小石川、今年も強い?!」でしたが、惨憺たる船出でした。インターハイ予選初戦敗退（明大中野）、新人戦予選敗退（都両国）、招待試合負け（法政一）、支部大会（東洋）敗退…一時はどうなることかと…

自主的に（一部）部員、コーチ一緒に丸坊主にしたこともありました。

5校対抗（小石川・開成・麻布・日比谷・上野）は何とか優勝、吉川さんの昨年の活躍？で支部選抜にはお声がかかりました。センター（今でいうMB）で試合にも出してもらいました。

その支部選抜でチームメイトだったのが、当時、東洋高校キャプテン、現在、何年か前に春高女子

連続優勝で脚光を浴びた大分・東九州龍谷高校の相原昇くん（現監督）でした。いろいろ教えてもらい、レベルの違いを感じ、その後の糧になりました。

早春の都立対抗、準決勝敗退（都足立東）でしたが、3位で春を迎えました。

関東予選前に木元コーチの策略でいろいろなチームと練習試合をこなし、その策略が見事の中し、ライバル校を撃破、都代表で関東大会に出場することができました。

本大会では初戦で群馬県2位の高崎商業とフルセットにもつれたのですが残念ながら負けてしまいました。しかし、最高の高校バレー生活を送れました。最高の経験と仲間…今でも一番の宝物です。後日談ですが、この試合を観戦していた某バレーボール雑誌の記者さんが何をどう間違えたが小石川が高崎商業に勝利し、そのあと埼玉の名門深谷高校に勝利した。（この年の春の高校バレーでは深谷は全国3位だったのですが、なんと高崎商業に負けてしまったのです。）と載ってしまったのです。そのあと、関東近県の名門校から練習試合の申し込みが殺到して、マネジャーが「雑誌が間違いです。」断っていた記憶があります。

本当に今となっては楽しい思い出しかありません（ここには書けないことも多々ありますが）、最高の仲間と現役の3年間、その後もOBとして。今年で小石川を卒業して30年になりますが、それぞれ皆、社会では責任ある立場になった同級生（笠井・酒井・下田・高見沢・秋池・吉沢・高橋功・永井・小泉・高橋雅・二瓶・高沢（敬称略）/吉田・松本マネ）ほとんどの人、そして、コーチの木元さんとは年に何回か集まって、思い出をつい昨日のこのように語らいながら酒を酌み交わしています。

「都立の星」と言われた1つ上の先輩方、非常に学業優秀だった1つ下の後輩たちをはじめ、近辺世代の先輩後輩ともいろいろな所で会っており、小石川バレー部の伝統の下、四半世紀以上のお付き合いをさせていただいております。特にコーチの木元さん、1つ下のキャプテン田淵くん、2つ下のキャプテンの中川くんとは、毎年5、7、8月に湘南鵜沼で開催されるビーチバレーに20年以上連続して出場しています。2002年にマグレ？で1回だけ優勝できましたが、最近では予選突破もままなりません。しかし、そこに何人かの後輩も応援に来てくれて、試合後一緒に飲むビールが最高で、ビーチバレーに行っているのか？飲み会に行っているのか？どちらがメインかわからないです…

最後に

私の知りうる限り、2年連続関東大会出場を果たした小石川バレー部史上最強のエース、小石川現役当時、高校の物理授業でもバレーでもお世話になった綱河さん（先生）、現役時代は「そんな、エース辞めちまえ！」、引退してからは「おまえなら、絶対できると思ったからあそこまで言った。」と静かに笑いながら、本当にバレーが、そして小石川が大好きだった故溝口さんを筆頭に諸先輩方、そして、いつも一緒に関東大会出場の夢を目指した同輩、後輩たち…出会えたことに感謝します。この7年くらい、毎夏に東京寺子屋という中等教育学校2年生の後輩に対して、職業のお話をさせていただく機会をいただいております。その際に必ず話すのですが、

「私の今の身体のほぼすべては小石川が作ってくれました。小石川、バレー部、クラス（B組）すべての仲間が作ってくれたのです。皆さんもこの小石川でそんな仲間を作ってください。絶対、一生の仲間になるはずだから！」と。

近頃の五中会には仕事である動物病院の休診日との関係もあり、ご無沙汰してしまい申し訳ありま

せん。

この先、80周年、そして100周年と更なるご盛會を心より祈念いたしまして、自分の文章構成力、表現力のなさに落胆しつつ、本当にダラダラとかなり長くなってしまいました。そこはお許しいただき、ここに筆を置きたいと思えます。

大好きです小石川、そしてバレー部… 感謝、感謝です。

(今回、あえて大切な仲間の名前をたくさん出させていただきました。)

指導者としての原点

杉原 英雄 (平成12年卒)

私は現在、都立の特別支援学校に勤務しています。知的障害をもつ高校生とバレーボール部と一緒に活動しています。また、知的障害者バレーボール東京都代表女子チームのスタッフとして社会人を含めたチームの活動を行っており、2013年には全国障害者スポーツ大会「スポーツ祭東京2013」で全国大会10連覇を達成しました。

このように部活動と東京都代表チームでバレーボールの指導をしていますが、小石川高校バレーボール部で過ごした日々が私の指導者としての礎になっていることは間違いありません。私が現役の時、「好きこそ物の上手なれ」とよくOBの方々がおっしゃっていました。その言葉のとおり、私は高校生になって改めてバレーボールの楽しさを知り、バレーボールがますます好きになりました。バレーボールのことをもっと知りたい、もっと上達したいと技術やフォーメーション等を一生懸命勉強しました。専門書を読むだけでなく、OBの方々から試合中の様々な場面での対応や考え方についてたくさんのことを学びました。また、この頃に教師を志すようになり、バレーボールと長く関わっていきたいと思ひ、それが今につながっています。今の自分があるのは小石川高校バレーボール部を通じて関わってくださった方々のおかげだと思っています。

数年前から後輩たちも教員になり、バレーボール部の顧問をするようになりました。以前、私が指導している生徒たちと後輩の指導している生徒たちとの練習試合をさせていただきました。障害の有無を越えたバレーボールを通しての交流は選手、指導者ともに相互理解の一助になりました。

今後も私が小石川高校バレーボール部で学んだ「好きこそ物の上手なれ」を基に、選手がバレーボールを好きになり、長くバレーボールに関われるような指導を目指します。

最後になりますが、小石川中等教育学校バレーボール部の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。

バレーから教わったこと

楠美 有紀子と仲間たち (平成14年卒)

30代。結婚、出産、仕事と人生の大事なイベントがあったりなかったり、皆それぞれに毎日を満喫中！先日、フジコの赤ちゃんお披露目で久しぶりに集合したとき。「子供にもバレーをやらせたんだ。教わったことがいっぱいあった。」だって。一同「そうだよね！」その時の雰囲気のまま、バレーの良さと、面白い話や印象的なことを寄せ書きしてもらいました。

村上（藤田）明花

・何といっても夏合宿が印象的。1年生の時の初めての合宿、先輩の作成した合宿のしおりに『今いるのは下界、合宿地は上界。』と書かれていたのを今でも忘れない。実際に行ってから意味がよくわかった。

・合宿練習が辛すぎて、いっそケガでもしたほうが…との思いがかすめたが、ケガをした男子部員が体育館前の坂（通称：ゲロ坂）を無限に往復ランニングしているのを見て絶対にケガをしたくないと思いなおした。

・<その他細かい合宿エピソード>

部屋の冷蔵庫をずらしたらキノコが生えていた。

マネージャーさんの作ってくれたはちみつレモンに蟻が行列をつくって集っていた。

夕食のハンバーグを食べようと箸を入れたら、箸のほう折れた。ハンバーグのほうを割りたかった。

宿から体育館までは、アップがてらランニング。走り出す目印の TOSTEM の看板をにらみすぎて、15年以上経った今でもその画像がはっきりと目に浮かぶ。

・大学生の OBOG がコーチになって練習に来てくれていたが、実際に大学生を経験してみるとそのありがたみが分かった。改めてお礼を言いたい。

・「お願いします」とボールを渡す、セッターが上げやすい位置にボールを返す…次の人を思いやってつなぐという考え方は、社会人になった今、仕事のやり方の根底にある。大事なことを教えてもらったと思う。

森（小野）陽香

・顧問の先生方のありがたさ。教育実習をやってはじめて知ったことは、部活は完全に勤務時間外とのこと。毎週末、夏休み期間中などもずっと監督として引っ張ってくださった若菜先生は本当にすごいと思う。

・苦しいことも楽しく（楽しいと思って）こなすのは、バレー部での経験あってこそと思う。

・みんなそれぞれが、自分の立場でできることを考えて、その役割を果たすように努力していた。できることからみんなの為にと意識を持てたのはバレー部のおかげだと思う。

菊地（川上）文絵

女バレはみんな優しい！お菓子を作ったとき、ちょっと失敗しても美味しいって食べてくれる(笑)

合宿＝洗濯。メッシュ素材は乾きやすくて素晴らしい

みんなと部屋が違うから寂しかったよー。

マッサージとかテーピングとかすごい勉強したなー。みんなが喜んでくれると嬉しかった。

ストップウォッチの音が聞こえなくて、たまに笛吹くのが遅くなるのが…苦しめてごめん。

あと、挫折禁止

大塚（千葉）久美子

・自分の役割について

スパイクやブロック等できないことはたくさんあったけど、チームのために自分のできること、やるべきことを、考えるようになったし、みんなが考えていたと思う。

・先生、先輩、後輩

挨拶や礼儀など、教えてもらえた。先輩がきちんとした姿、努力する姿を見せてくれた。感謝でいっぱい。

・同期

楽しい仲間に恵まれてよかった！

他

今となってみると、辛かったことが頭に浮かんでこないくらい、些細なことが楽しいかった。もっとバレーボールが上手になりたかったなあ。

楠美有紀子

つらいとき疲れた時こそ、声を出す、笑顔でいる。今でも毎日の心掛け。ソレー！

ボールの芯をとらえる。この感覚は色んな分野で役に立っている気がする。

あきらめないプレーの感動。つながったときの一体感。丁寧なパスをもらったときのうれしさ。どのシーンを思い出しても心が温くなる。明日もがんばろって思う。

最後に…みんなの意見をまとめるつもりでしたが、文章にある「らしさ」を生かしたくて、このような形になりました。教わったこと、印象的なこと、まだまだあり、とても書ききれません。全員が感謝の気持ちでいっぱいです。先生方、OBOG の皆さま、先輩後輩の皆さま、大事なことを言葉で、行動で、根気強く教えてくださり、ありがとうございました。それは私たちの原点となります。

選手／指導者で携わる小石川バレー部

梶田 真里（平成 16 年卒）

（顧問の先生の思い出を参照）

バレーボール部で得たもの

笈川 竜（平成 18 年卒）

この十年はリーマンショック、東日本大震災、東京オリンピックの開催決定など、時代が大きく動いた時期であった。高校を卒業し今年で十年、大学を出て社会人として数年たった現在から当時を振り返ってみたい。

バレーボール部に入部するまでは、これ程までにひとつの事に打ち込むということはなかった。中学時代にバレーボール部に所属してはいたが、ほぼ初心者で入部した私にとって高校のバレーボールは異次元のように思えた。何とか諸先輩方のようにうまくなりたいと必死に練習を重ね、初めてレギュラーに選ばれた時のことは今でも覚えている。やがてキャプテンを任され、諸先輩方の熱い指導を受けながらチームを牽引する日々はとても充実していた。最後の大会であった関東大会予選は二日目まで進んだものの出場は叶わず、部活を引退する際には涙が溢れた。

あの当時から十年経ち様々なことを経験してきたが、バレーボール部以上のものは未だない。丁寧に優しく、時には厳しい諸先輩方の指導や、朝から放課後、土日まで練習をし、常に共に過ごして

きた仲間のおかげで心身共に成長することができ、現在の自身の基礎となっている。
最近では近い世代で年に1回、近況報告会を実施している。結婚した人、家族ができた人、夢に向かい精進している人、三者三様であり、別々の道を歩むことになっても集まる仲間は掛け替えのない宝物である。

このような素晴らしい経験をさせてくれたバレーボール部が創部七十周年を迎える。中高一貫校となった今でも継続活動しているのは嬉しい限りである。今後も何十年と継続し百周年を迎えることを楽しみにしている。

今後のバレーボール部の益々の活躍と発展を祈念しております。

小石川バレー部での3年間

能登 史佳（平成19年度卒）

高校生の頃は、朝練から始まり、昼休みも放課後も、土日でも、授業以外の時間はほぼ部活に関わっていた。今思えば、どこにそんな体力があったのかわからない。現在はかろうじて20代だが、平日5日間仕事（事務職）をしているだけでも金曜日には疲労感いっぱい。10代とはなんてパワフルなんだろうと思う。

いつも部活の練習中は、これでもかというほど声を出し続けていた。出さないと先生にも先輩にもすごい勢いで怒られた。自分が先輩になったら、声の小さい後輩を怒っていた。部活が終わって、更衣室で他の部活の友人と会うと、「声どうしたの」とよく言われた。一番ひどかったのは、まだ喉が慣れていない1年の時の夏合宿後だ。合宿から家に帰ると、「ただいま」も言えなかった。声が「枯れる」とは、まさにこのことだと身をもって経験した。この後しばらくは電話にも出られなかった。そんな状態で、創作展の準備でクラスの友人と打ち合わせをしていたら、あまりにも苦しそうに話す私を見かねて、「もう喋らなくていい」と言われた。しかし、当時の自分にとっては、そんなかすれた声が頑張った勲章のようで誇らしかった。

毎日必死でボールを追いかけていたあの頃。声を絞り出して走り回ってヘトヘトで、それでも根気ですがみついて練習に励んだあの頃。何故あんなにも一生懸命になれたのだろう。でも、あの日々があったからこそ、今辛いことがあっても、部活を思い出すと「あれを乗り越えてきたんだから頑張れると思うよね」などと、同期に会うといつもそんな話をする。

3年間も毎日のように一緒に過ごしていれば、当然楽しいことばかりでなく、ぶつかったりすれ違ったり色々な困難にも直面してきた。自分勝手にみんなを嫌いになり傷つけたりしたこともあった。それでも、最後には受け入れて許してくれたチームメイトに、今でも感謝している。みんなだったからこそ、やってこれた3年間だったと、心底そう思う。

社会人となった今でも、一番繋がりが深いのは小石川で出会った友人である。バレー部の同期とは、今でも旅行に行くほどの仲だ。小石川で、バレー部で、自分の核と、一生ものの友人をつくることができた。

最後に、この小石川バレー部を70年も存続してきてくださった多くの諸先輩方に感謝申し上げます。また今回、このような記念の場に寄稿させていただけたことを光栄に思います。ありがとうございました。

つなぐ醍醐味、つながる喜び

私にとって小石川高校で過ごした 3 年間は、買えるならば何度でも買いたいほど素晴らしい 3 年間だった。そんな気持ちにさせてくれたのは、何よりバレー部の存在が大きい。

私は幼少の頃からスポーツといえばサッカーに親しみがあり、中学校ではサッカー部に所属していた。私の身体の成長は遅く、中学 2 年を迎える頃には身体能力で周りにぐんと差をつけられ、いつしかサッカーを嫌いになってしまっていた。そこで私は言い訳という色んな理由をつけて途中で退部した。

そして小石川に入学し、部活を選択するにあたり、必然的に中学時代の苦い思い出が頭をよぎり、どこか楽しそうな、和気藹々と過ごせる部活がいいと考えていたところ、オリエンテーションで見た先輩たちの楽しそうな様子に心を惹かれ、バレー初心者にも関わらずいとも簡単に入部を決めていた。

2 年生も 3 年生も、本当にユニークな方たちばかりで、正直ずっと不真面目な人たちだと思っていたが大きな間違いだった。入部してまもなく 3 年生の引退の大会が迫り、普段はおちゃらけてばかりの人たちが見せる真剣な姿にいつしか完全に心を奪われていた。真剣なだけではない、先輩方とはかく上手で、ものすごく格好良かった。

この頃であったらだろうか、楽しそうだからと安易に入部した私は、バレーボールという、ひとつのボールを仲間と必死になって繋ぐスポーツに夢中になっていた。そして、一生懸命に練習に取り組んで、先輩方のように格好良くなるのだと決意していた。もう、中学の時のように逃げたくはなかった。

公の場を書いて許されるか際どいところであるが、当時、体育倉庫の合鍵を作り、毎日始発で登校して朝練の 1 時間前からコートを組み立ててサーブ練習やレシーブ練習をしたり、オフの日にも剣道場でボールを触ったり、昼練や放課後練も、チャイムが鳴ったと同時に教科書を放り投げ、アリーナに走っていた。

結果として、バレー部生活で華々しい成績を残せたわけではないが、私にとって、小石川高校バレー部での生活は、当時はもちろん、卒業して 10 年近くが経つ今でも、色褪せることなく輝いている。

最後に、優しく厳しく指導してくださった布施先生、いつも優しい笑顔で見守ってくださった八坂先生、的確な指導をして下さる OB や先輩、短気でわがままな私とともに過ごしてくれた同期、ついてきてくれた後輩、皆様に心の底から感謝しています。小石川バレーボール部、万歳！！

振り返れば、感謝

長田大翔 佐藤秋彦 石原孝芳 高木思歩(平成 22 年卒)

9 月某日、新宿某所、何か月ぶりだろう、小石川バレー部同期が一堂に会した。

高木： 久しぶりー。遅れてごめんねー。

石原： 確かにこないだは上着着てた気がする。

石原： お疲れさま。これで全員そろったね。

高木： まあ早速だけど思い出話しようか。

佐藤： 会うのいつぶりだろう最近会った気がする。

石原： 1 年生から振り返りますか。

確か最初はどっかの教室に集まったよ

長田： あれ、冬じゃなかった？

ね？

佐藤：絶対こいつ(石原)とは仲良くなれない
と思った。

長田：そんなのあったっけ？

佐藤：説明会みたいなのがあったじゃん。

石原：みんなクラス違ったし出会いはそこだ
よね。

佐藤：そうだね、練習より前にそこだね。

長田：最初の練習は人すごいいたよね。
体操の円がすごいでかかった気がする。

高木：私に来たときはもうそんないなかった。

佐藤：しほちゃんが最初に来たの昭和第一で
しょ？
一緒に帰った記憶あるもん。

高木：でもまだあのときは入部してなくて。

佐藤：しほちゃんが結局うちのマネージャー
になった動機はなんだったの？

石原：クラスで俺の隣に座ってたからでし
よ？

高木：毎日変わる変わる色々な先輩がきたの。
全身タイトの青山さんとか浜田さんも
佐々木さんも来たし。

佐藤：でもそれだけ？

高木：他にもラグビー部とかバスケット部とか勧
誘あったんだけど、かすみさんとあき
さんが来て連行されたの。

長田：連行って。(笑)

高木：それで練習行ったら志村さんのスパイ
クが顔面に当たって、土下座されて。

佐藤：よく入ってくれたよね。

石原：マネさんいるといないとじゃ全然違う
からね。

長田：ジャージとか脱ぎっぱなしだもん。

佐藤：あとは真夏の練習後の蜂蜜レモンでし
よ。
あれのおかげで蜂蜜克服したもん。

石原：部員は最大で5人いたのかな。

長田：加瀬と野川と俺ら3人か。

佐藤：加瀬が辞めたとき石原が泣いたの覚え
てる。
石原も辞める云々あったよね。

石原：あったねー。そのせいで佐藤セッター
の練習やってたんでしょ？

長田：さらっと戻ってきたけど。

石原：でも泣いたといえば佐藤も合宿で泣い
たよね。

長田：恒例のドッキリのやつ。

高木：本来なら2年生は仕掛け人なんだけど
ね。

佐藤：1年の時行けなかったからな。

石原：長田が辞めるってなったら泣くんだも
んね。
本当に仲間思いだよ。

高木：合宿は結構つらかったんじゃないの？

石原：本当にしんどかったよ。

佐藤：朝早くから長距離走った後5分間ジャ
ンプ。

長田：あれだけやった後に朝食なんか食べれ
ない。

佐藤：地獄のレシーブワンマンもあったしね。

石原：俺はその前に浜田さんの対人でしごか
れた。

長田：過呼吸になってたもんね。

石原：だいぶハードだったからなー。

佐藤：合宿もしんどかったけどブロックワン
マンが一番きつかったな。

高木：やっぱり部活はつらい思い出が多いん
だね。

石原：部活中は大変なことばかりだった。

佐藤：今はこうやって笑えるからいいけどね。
一番楽しかったのはやっぱりオフかな。

長田：更衣室で日々の愚痴言ったりして発散
してた。

佐藤：帰り道はマックで遅くまで喋ったりと
か、
コンビニでアイス買ったりとかしたし。

高木：そうやって絆高めていったのかもしれ
ないね。

佐藤：それは間違いないかもしれない。

石原：2人はバレー初心者だったのに最後まで
残ってくれたもんね。

高木： そういう意味では下の代の3人(小菅、竹内、瀧中)もよく残ってくれたよね。

石原： 6人ぎりぎりによくやってたな。

長田： 誰かが欠けても試合出れないという。

佐藤： 正直辞めたくても辞められないっていう感覚はあったんだろうね。

高木： 実は相談されたこともあったけど。

石原： そうだったんだ。佐藤が厳しかったんじゃない？

佐藤： 二人が全然怒らないからじゃん。

長田： うちらはそういうのできないタイプだから。

嫌われ役とかは適材適所ってことでさ。(笑)

石原： キャラじゃないから俺が怒ると変な雰囲気になるし。そういう意味では一つ上の代のキャプテンだった志村さんには憧れたな。

高木： 志村さんは存在だけでオーラあったもん。

長田： 朝練でちょっとネット張るの遅れただけでピリピリムードだった。

佐藤： 職員室も空いてないから仕方ないのに。

石原： 引退してから志村さんとその話したら、ごめんって笑って謝ってたけどね。

高木： やっぱり今となっては笑える思い出なんだね。そういえば年賀状で中澤先生が呑みた

いって言ってたよ。

佐藤： 久しぶりにお会いしたいね。

石原： 中澤先生にも感謝だよな。

長田： 一番感謝かもしれない。

佐藤： よく顧問の先生やってくれたよね。土日もうちらの練習のために学校来てくださって、練習の終わりには総評くれたり。

長田： もちろん試合の引率もしてくださったし。

石原： 当時はそこまで気付いてなかったけど色んな方に感謝だな。

長田： 人数少なかったから試合前の練習とかはたくさんOBさん来て試合してもらったり。

佐藤： あのとときは目の前のことに必死だったから。でもやっぱり一番の感謝はしほちゃんかな。

石原： 間違いないね。ほんとありがとう。しほちゃんいなかったらみんないなかったかもしれないんだからね。

高木： うれしい事言ってくれるじゃん。

長田： 結局当時はつらかったけど、今ではみんなに感謝してるってことかな。

石原： そういうことだね。五中会なかなか行けてないし、またみんなで揃って行きたいね。

そう言ってこの日は解散した。当時は色々あったけれど、バレーボールを通して出会った4人が笑いあえるのは、様々な方の支えがあってこそだと再認識することができました。4人を代表して御礼申し上げます。

“ありがとうございました”

バレー部と私

瀧中 建治 (平成23年卒)

小石川バレー部創立七十周年記念誌への寄稿の依頼を受け、今当時を思い出しながらこれを書いている。思い起こせば今から八年前の春。それは私が最後の

小石川「高校」生の一人として入学した春のことであった。入学したばかりの私はどの部活に入るかをなかなか決められずにいた。体格は比較的大きい方であったためか、ラグビー部やサッカー部など色々な部から声を掛けられた。その中でも最も熱心に、そして毎日のように勧誘をしてくれたのが当時のキャプテンである二年上の先輩の志村さんであった。初めは入部する気もなかった私であったがその熱意に押されついにバレー部に入ることにした。

練習は週に三日くらいと聞かされていたが、入ってみると平日には毎日朝練があったことには驚かされた。毎朝、こっそりと作った体育倉庫の合鍵を使い、眠い目を擦りながらネット張りをしたのを今でも覚えている。

入部して驚いたことは他にもある。それは週三日の午後の練習にOBさんがほぼ毎回指導に来てくれていたことである。コーチとして来てくださる方々の他にもたくさんのOBさん達に来ていただいた。バレーが好きで小石川バレー部が好きな後輩思いの方々ばかりだった。今考えてみると、そういう人達のおかげで今日まで七十年間もの長い間小石川バレー部が続いているのだと思うと感慨深い。私自身はあまりOBとして部に貢献できてはいないが、当時を思い出し、6年ぶりにまたバレーをあの体育館で先輩方とやってみたいという気持ちになった。七十周年おめでとうございます。

0からのスタート

吉田 里緒（平成24年卒）

中等1期生としてバレー部に入部した頃は、中学生は自分たちの学年しかいませんでした。入部した全員が初心者でしたが、バレーが本当に好きで、上手になりたい、勝ちたいと口々にしながら取り組みました。勝ちたいあまりに泣くほどの言い合いになることもありました。こんな初心者軍団でしたから、負けている試合でも、1点取れただけですごく嬉しくて、会場の先生たちが振り向くほどの声を出して喜びました。1年生大会で賞状をもらった時には、早く先生に見せたくて、入試後で立ち入り禁止の学校に行って先生を困らせ、怒られたことも今ではいい思い出です。振り返ってみると、最初の1年が自分たちだけのチームだったからこそ、チームについて真剣に向き合い、話し合う習慣が身に付き、その後のチーム作りに役立ったことはもちろん、代が替わってからも受け継がれていると感じます。

バレー部で様々な経験をできたのは、顧問の先生方の手厚い指導はもちろん、小石川高校の先輩方の応援があったからこそです。この場を借りて、感謝申し上げます。ありがとうございました。

バレー部での思い出

長尾 理平（平成 27 年卒）

男子バレー部ですごした日々は今も思い出します。公式戦ではまったく勝てませんでしたが、大学生の今では感じることでできない達成感や悔しさを部活を通して感じることができました。自分の中で特に印象に残っているのは、自分がキャプテンになったときと都立高対抗戦で二日目にすすめた時のことです。

自分がキャプテンに選ばれたときはとてつもなく不安でした。当時は皆高校一年ということで、よく言えば個性豊かな、悪く言えば我儘な連中だらけだったので(笑)当時顧問の塩澤先生や志村さんや佐藤さんなど OB さんの力を借りて何とか練習していた感じでした。

高校二年生になると梶田先生が小石川にいらっしゃり、練習メニューが洗練され結果的に都立高対抗の二日目に進むことができました。二日目には関東大会に出場するような高校と戦うことができ、レベルの違いと練習不足を思い知ることができました。

バレー部での思い出を挙げるときりがありませんが、バレー部に入ってバレーというスポーツが好きになれてほんとうによかったです。これからもバレーを続けて、梶田先生のように速くて高くてカッコいいスパイクが打てるようになりたいです。

長くなりましたが OB・OG のみなさま、いつもお心にかけていただきありがとうございます。今後とも一層のご指導をよろしくおねがいします。

バレーボールで得たもの

清本 和俊（中等 6 期）

私は小学生の時からバレーボールをやっていたので、小石川に入学する前から、部活はバレーボールをやろうと決めていました。バレー部に入部したときは、中等 3 年が 3 人だけの部活でした。部活と言っても顧問をして頂いていた塩澤先生は、バレーボール経験がないため、OB さんが来ない日はパス、サーブやスパイク等基本的なことを自分たちでやるだけで、1 日の練習が終わります。試合には他校との合同チームで出場し、練習試合はもちろんのことチーム練習さえもできない日々が続き、何度も辞めたいと考えました。しかし、中等 2 年では、後輩も 1 人入り、3、4 年生の先輩も増えて、中等 3 年になったときには、同級生の部員が増え、バレー部はどんどん賑やかになり、それに伴ってバレーボールが楽しくなっていました。中等 5 年になり、先輩に引っ張られる

立場から後輩を引っ張っていく立場で、キャプテンになりました。部員同士の衝突も何度かありましたが、それも今となっては良い思い出です。

私はこれらを通じて、最後まで続けることの大切さを学びました。もし1年生のときに部活を辞めていたら、最高の先輩、後輩、先生、そして友人達と出会うことなく、小石川生活を過ごしていたでしょう。バレーボールを通して、何にも代えられない経験をし、その経験は一生の思い出となると思います。

謝辞

岩城 弥乃（中等6期）

私は小学生の時からバレーボールをやっていたこともあり、バレーボール部に入部しました。入部した当時は、とても活気がある部活で、それを作り上げている先輩方に憧れていました。中等5年になり、1年間最上級生としてメニューの組み立て、戦略立て、部活全体の統率を図ることなど、最上級生としての大変さを感じ、悩むことが多くありました。しかし、先輩や先生方の助言や後輩が支えてくれたおかげで1年間頑張ることができました。また、5年間部活を続けて1番印象に残ることは、OB・OGとの繋がりです。小石川バレーボール部は70年という伝統のある部活なので、幅広い年代のOB・OGの方との繋がりを持つことができました。五中会では、OB・OGの方と試合することによって、技術指導を受けて技術の向上ができ、様々な先輩方と関わりを持つことによって礼儀を身につけることもできました。また、ユニホームや横断幕を作ってくださいなど、より良い環境づくりをして頂きました。

様々な方面から部活を支え、今日のバレーボール部を作り上げて下さり、本当に感謝しています。このような伝統のある素晴らしい小石川バレーボール部に所属できたことを嬉しく思います。